

第1章. 加賀市の歴史的風致形成の背景

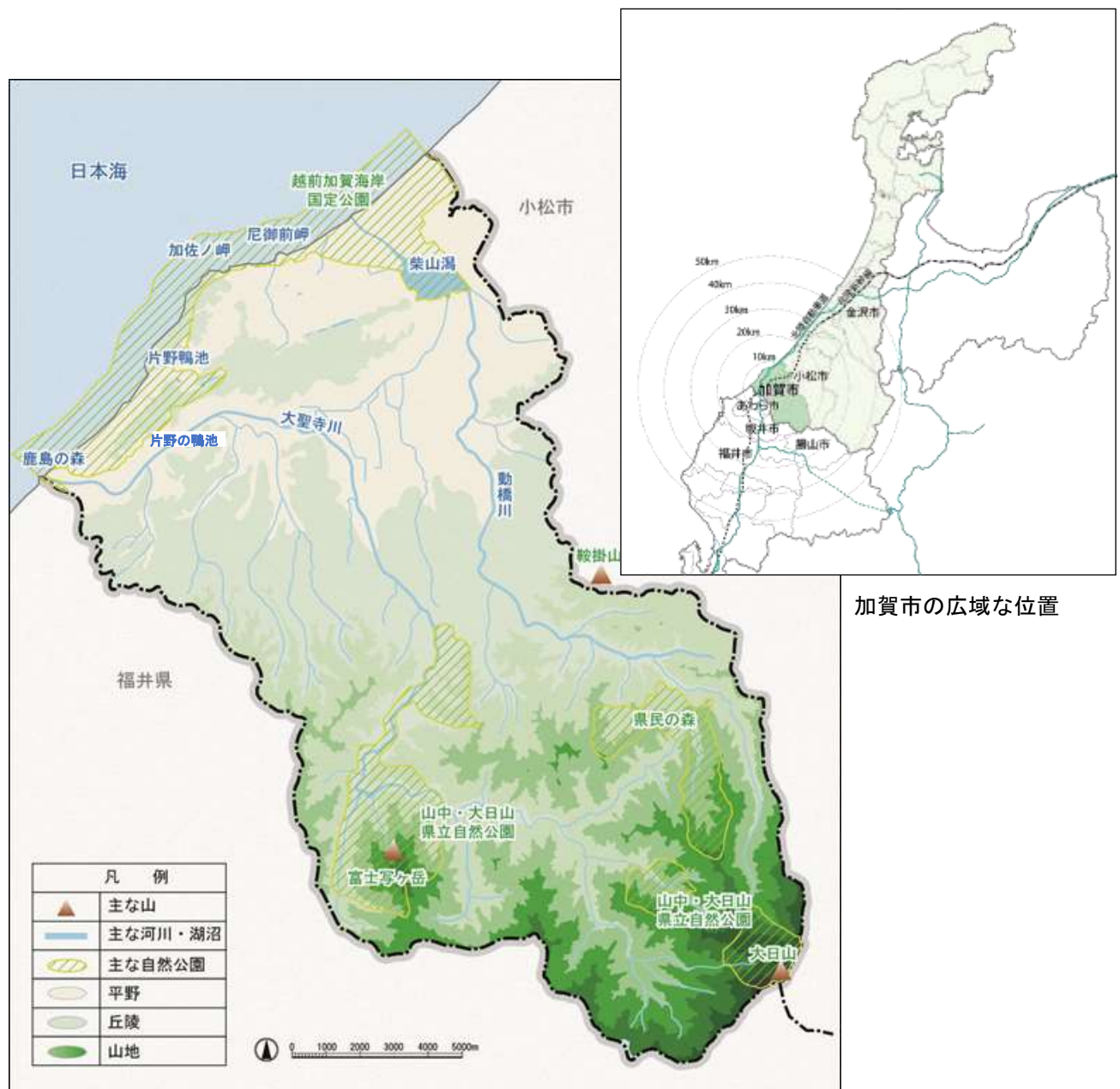
1. 自然的環境

(1) 位置

1) 位置

加賀市は、石川県の西南部に位置し、16.5kmに及ぶ美しい海岸線は越前加賀海岸国定公園に指定されている。また、南東部に位置する大日山（標高 1,368m）に源を発する大聖寺川・動橋川が日本海に注ぎ、それぞれの流域に開けた森や水に恵まれた地域である。

面積は、約 305.87 km²で石川県の総面積（4,186.05 km²）のおよそ 7.3%を占めており、小松市と福井県あわら市、坂井市及び勝山市と隣接している。金沢市からは約 40km、福井市からは約 25km に位置し、東西約 23km、南北約 28km の形状である。



加賀市の広域な位置

加賀市の自然環境現況図

（２）地形・地質・水質

１）概要

海岸線は越前加賀海岸国定公園に指定されており、塩屋から片野にかけての砂丘地に広がる海浜植物群落及び海食崖景観地である加佐ノ岬^{か さ}や尼御前岬^{あまごぜん}、白山眺望点でもある柴山潟、日本有数のガンカモ類の越冬地でラムサール条約登録湿地でもある片野の鴨池など、優れた景観と貴重な動植物などが生息する豊かな自然環境を有している。

また、動橋川や、鶴仙溪^{かくせんけい}を有する大聖寺川は、南部の山地を源とし丘陵の間をぬいながら日本海に注いでおり、大聖寺の市街地内を流れる大聖寺川の沿岸は親水空間として市民生活に潤いを提供している。

大日山や富士写ヶ岳^{ふじしゃがだけ}をはじめとする山地は、水源かん養などの公益的機能のほか、クマタカやカモシカなどの動物が生息する豊かな自然環境を有する。さらに、県民の森や山中・大日山県立自然公園にも指定されており、森林レクリエーションや環境学習^{やましる}の場として活用されている。山中温泉や山代温泉を包む丘陵地及び山地は、市街地周辺の景観を保全するため風致地区に指定されている。

また、藩政期より昭和にかけ築かれた砂丘地の松林は、日本海より吹く季節風から人々の生活を守るとともに、自然休養林としてレクリエーションの場となっている。



片野の鴨池（県指定の天然記念物）



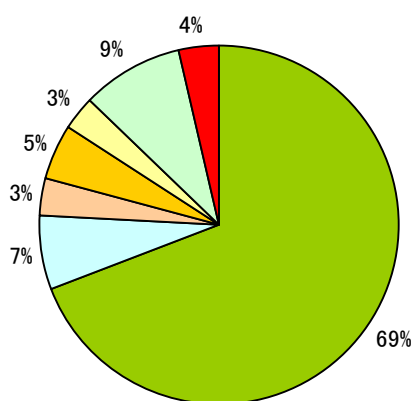
山代温泉さざえ堂から望む山並み

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

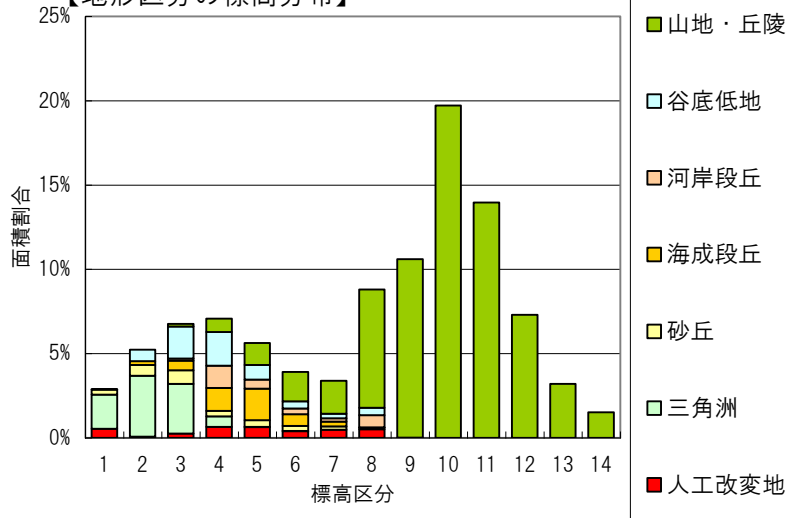
2) 地形及び地質

地形及び地質は、低地、台地、丘陵山地に大別される。北側は日本海に面し、台地・丘陵（橋立台地・丘陵）が分布するとともに、砂丘が続く。市域中央の低地は潟が埋積された三角州であるが、大聖寺川・動橋川に挟まれた中央部の標高が高い。南側は山地で、標高100m以下のなだらかな丘陵を前山として、標高1,300m以上に及ぶ火山性の山地が広がる。また、大聖寺川・動橋川の両河川沿いには河岸段丘が発達している。

【地形の面積割合】



【地形区分の標高分布】



【標高区分】

1	0 ～ 2m	5	20 ～ 30m	9	100 ～ 200m	13	800 ～ 1,000m
2	2 ～ 5m	6	30 ～ 40m	10	200 ～ 400m	14	1,000 ～ 1,366m
3	5 ～ 10m	7	40 ～ 50m	11	400 ～ 600m		
4	10 ～ 20m	8	50 ～ 100m	12	600 ～ 800m		

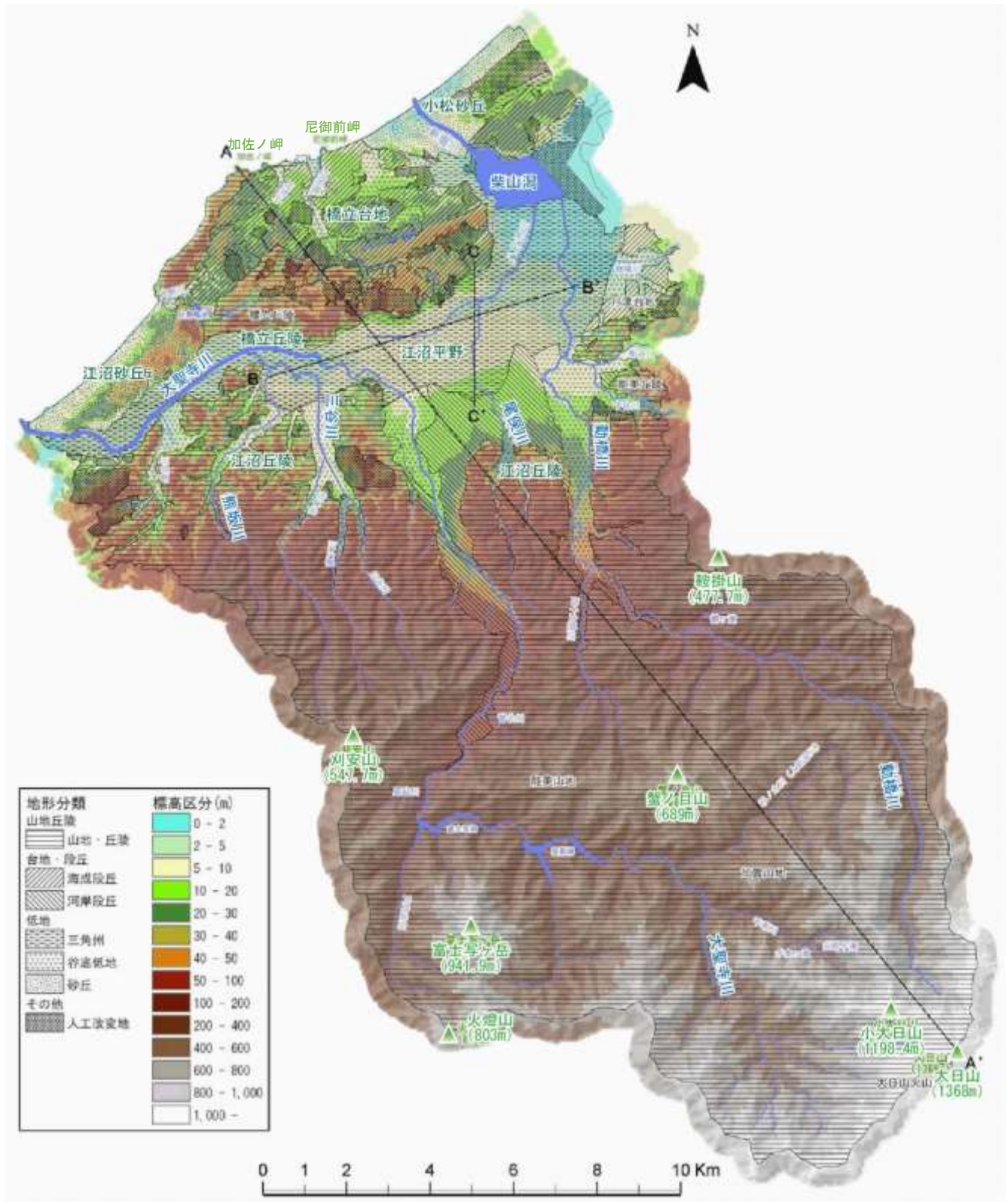
地形分類と標高分布（国土地理院発行：数値地図 50mメッシュ標高を利用）

加賀市域の面積の7割弱は、丘陵から山地が占める。その標高は5～1,300m以上に跨り、100m以上はほぼ全てが山地である。これに対し、標高凡そ50m未満の低地から台地では、三角洲や砂丘、海成段丘、河岸段丘等、海や河川の浸食、堆積作用により形成された多様な土地条件を示す。

※加賀市歴史文化基本構想より

3) 水系

加賀市域は、大日山系を源流とする大聖寺川と動橋川の2つの水系に概ね大別できる。両河川ともに多くの支流が流入し、大聖寺川は市域北西部で日本海へ、動橋川は市域北東部で柴山潟に至る。また、大聖寺川・動橋川とは独立したいくつかの小水系が、沿岸部の台地等に見られる。



※加賀市歴史文化基本構想より

地形断面図（A－A' B－B' C－C'）は、加賀市歴史文化構想に記載
<https://www.city.kaga.ishikawa.jp/data/open/cnt/3/191/1/11290.pdf>

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

(海岸線の様子)



① 江沼砂丘（大聖寺砂丘）

（市域西側：塩屋町ほか）



② 橋立台地の臨海部（市域中央：黒崎町）



③ 小松砂丘（市域東側：伊切町）

(主な山地)



④ 富士写ヶ岳（片山津町より）



⑤ 大日山（二子塚町より）



⑥ 鞍掛山（二子塚町より）

(動橋川)



⑦ 上流域（山中温泉荒谷町）



⑧ 下流部（動橋町）



⑨ 柴山潟遠景

(大聖寺川)



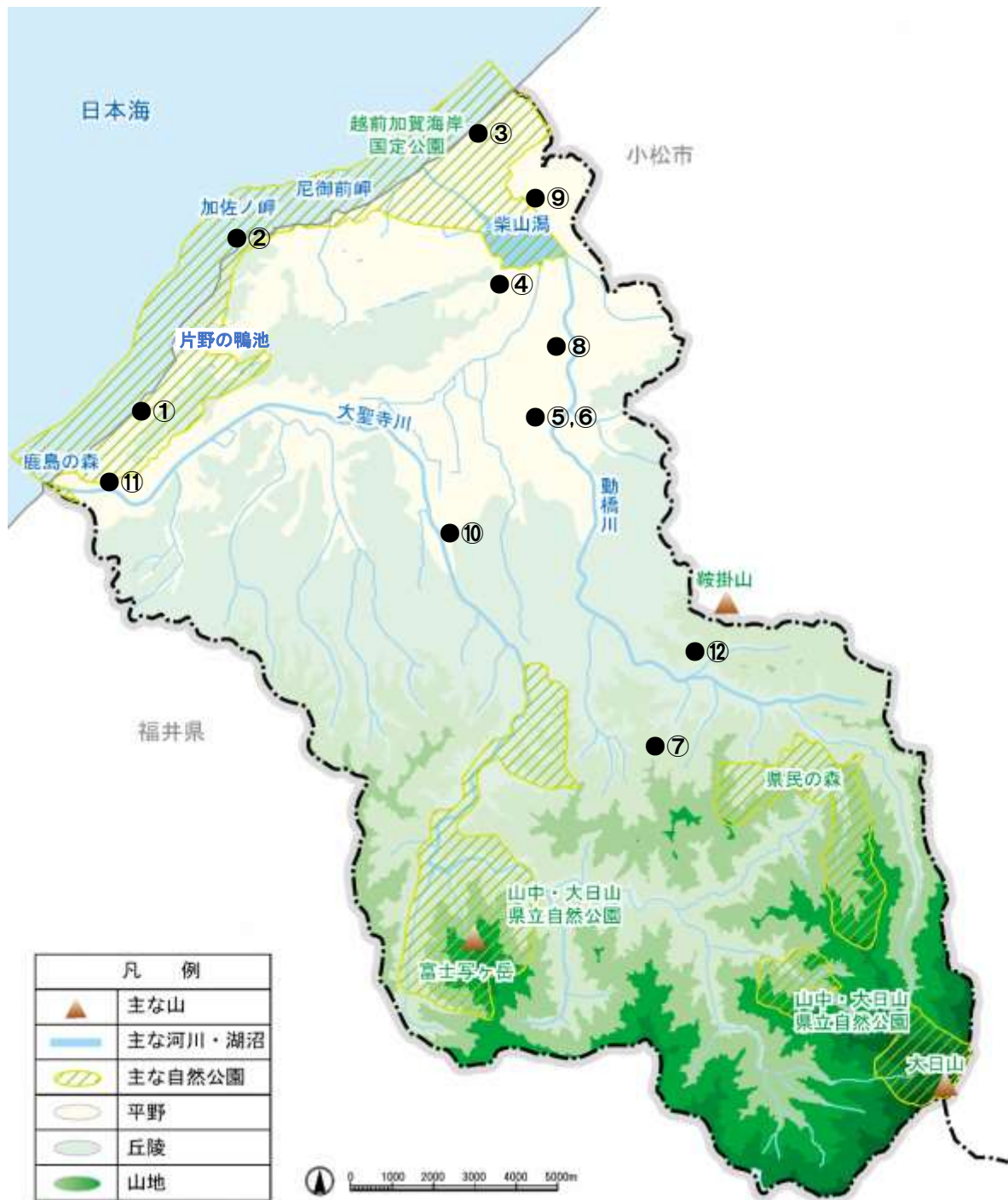
⑩ 河岸段丘付近（別所町）



⑪ 河口部（大聖寺瀬越町）



⑫ 鶴ヶ滝（動橋水系：山中温泉荒谷町）



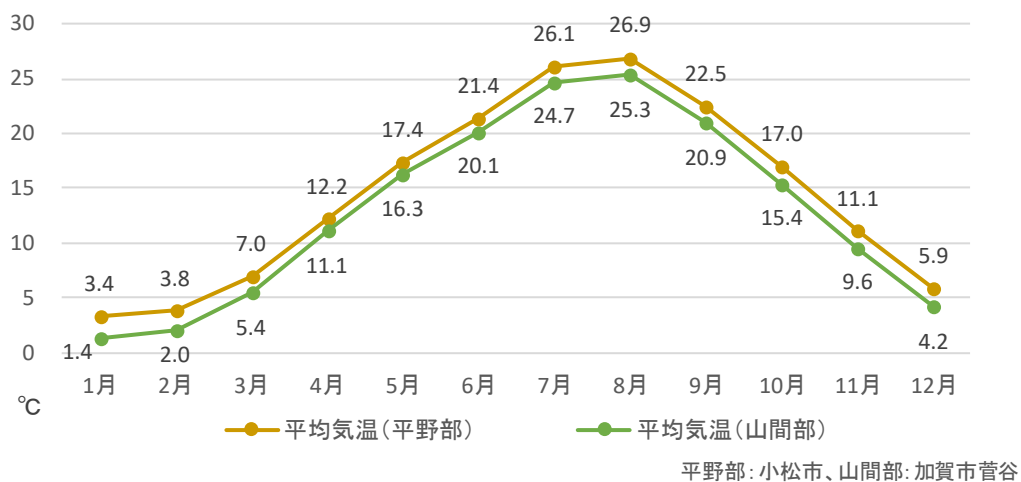
写真位置図（背景図：加賀市の自然環境現況図）

(3) 気象

1) 気温及び降水量

加賀市の気候は、日本海型の気候区分に位置し、日本海の海流や加賀山岳地帯、季節風の影響を受け、四季折々の変化がもたらされている。

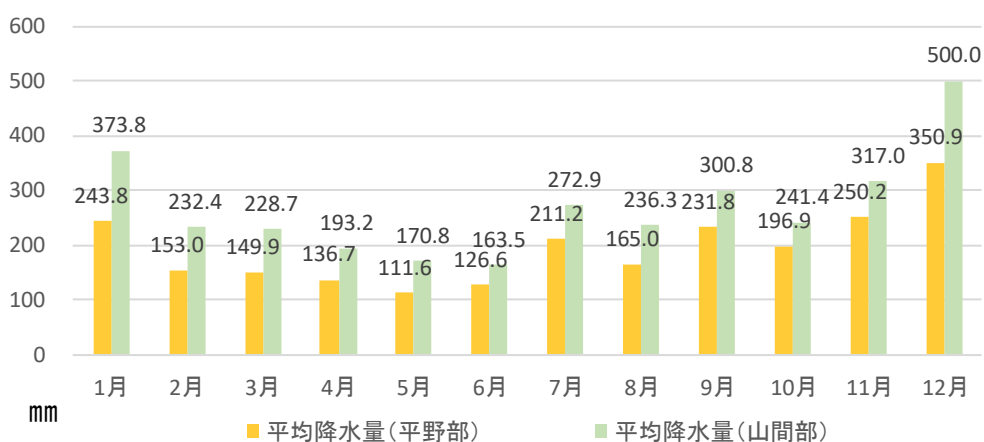
過去10年間の月平均気温の変化を見ると、平野部で3.4℃（1月）～26.9℃（8月）の範囲にあり、年平均気温は平野部で14.5℃、山間部は13.0℃である。



加賀市及び周辺の気温の平均値（平成20年（2008）～平成29年（2017））

※金沢気象台データより作成

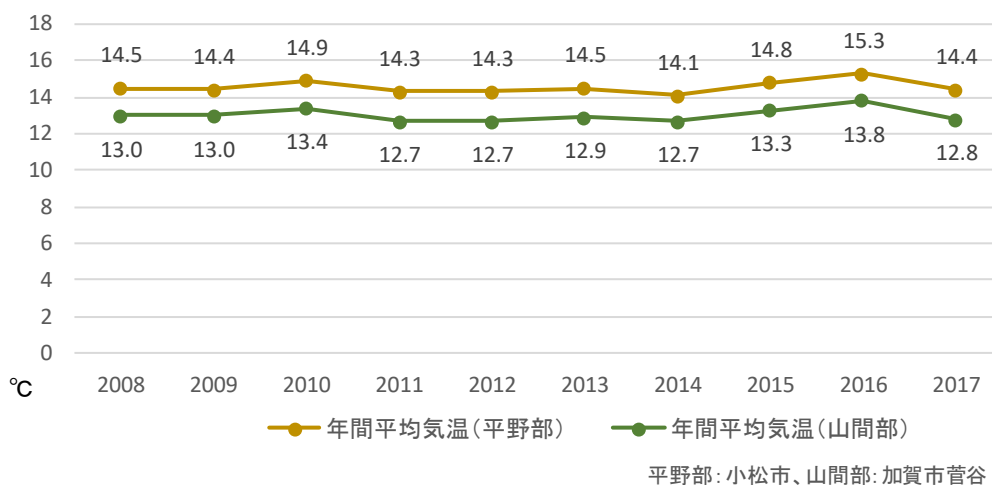
月平均降水量は冬に多くっており、特に最も多い12月（平野部：350.9mm、山間部：500.0mm）は、最も少ない5月（平野部：111.6mm、山間部：170.8mm）の3倍近い降水量がある。



加賀市及び周辺の降水量の平均値（平成20年（2008）～平成29年（2017））

※金沢気象台データより作成

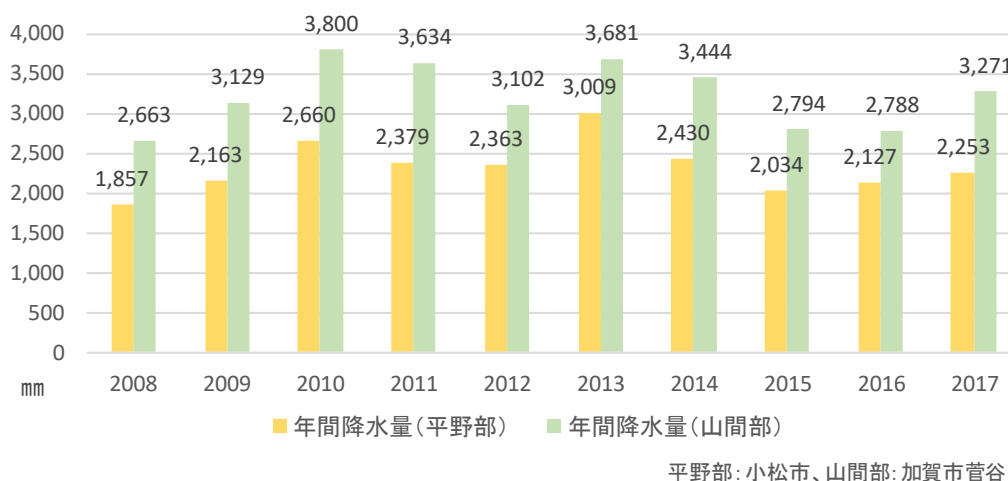
過去10年間の年間平均気温の変化を見ると、平野部で14.1℃～15.3℃、山間部で12.7℃～13.8℃の範囲にあり、大きな変化がない。



加賀市及び周辺の年間平均気温 (平成20年(2008)～平成29年(2017))

※金沢気象台データより作成

年間降水量は、平野部(1857mm～3009mm)、山間部(2663mm～3800mm)ともに10年間でばらつきがあり、例えば平野部で最も多い2013年(3009mm)は最も少ない2008年(1857mm)の1.6倍程度である。



加賀市及び周辺の年間降水量 (平成20年(2008)～平成29年(2017))

※金沢気象台データより作成

2. 社会的環境

(1) 市域の変遷

明治維新後に大聖寺^{だいしょうじ}県、金沢県を経て石川県江沼郡となったのち、幾多の変遷を経て、旧江沼郡のうち、昭和30年(1955)4月に山中町^{やまなか}、河南村^{かほみなみ}、西谷村^{にしに}、東谷奥村^{ひがしたにおく}の4ヵ町村が合併して旧山中町となり、昭和33年(1958)1月に大聖寺町^{やましる}、山代町^{かたやまづ}、片山津町^{いづりはし}、動橋町^{はしたて}、三木村^{みき}、三谷村^{みたに}、南郷村^{なんごう}、塩屋村^{しおや}の9ヵ町村が合併して旧加賀市となった。その後、平成17年(2005)10月、旧加賀市と旧山中町が合併し、現在の加賀市となった。



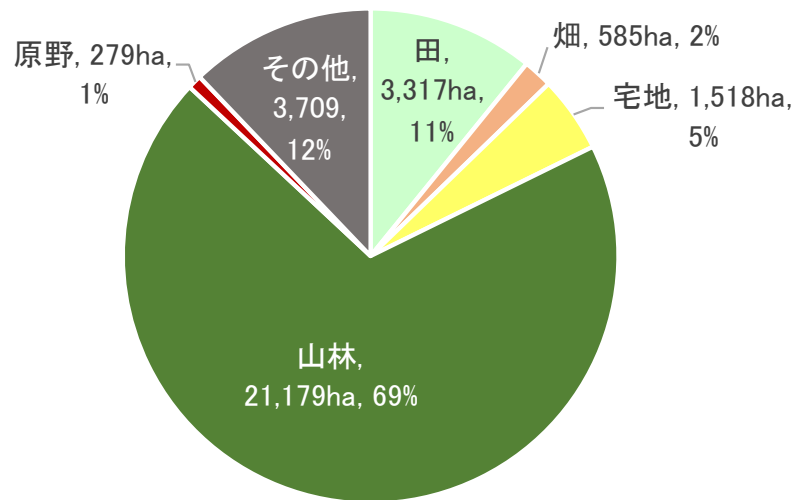
合併前の旧市町村界

※国土数値地図情報より作成

（2）土地利用

加賀市の中央は農地が広がり、市街地や集落が分散して存在している。市の南部は山林となっている。地目別には「山林」が最も多く、加賀市の総面積約 30,587ha のうち約 7 割を占めている。

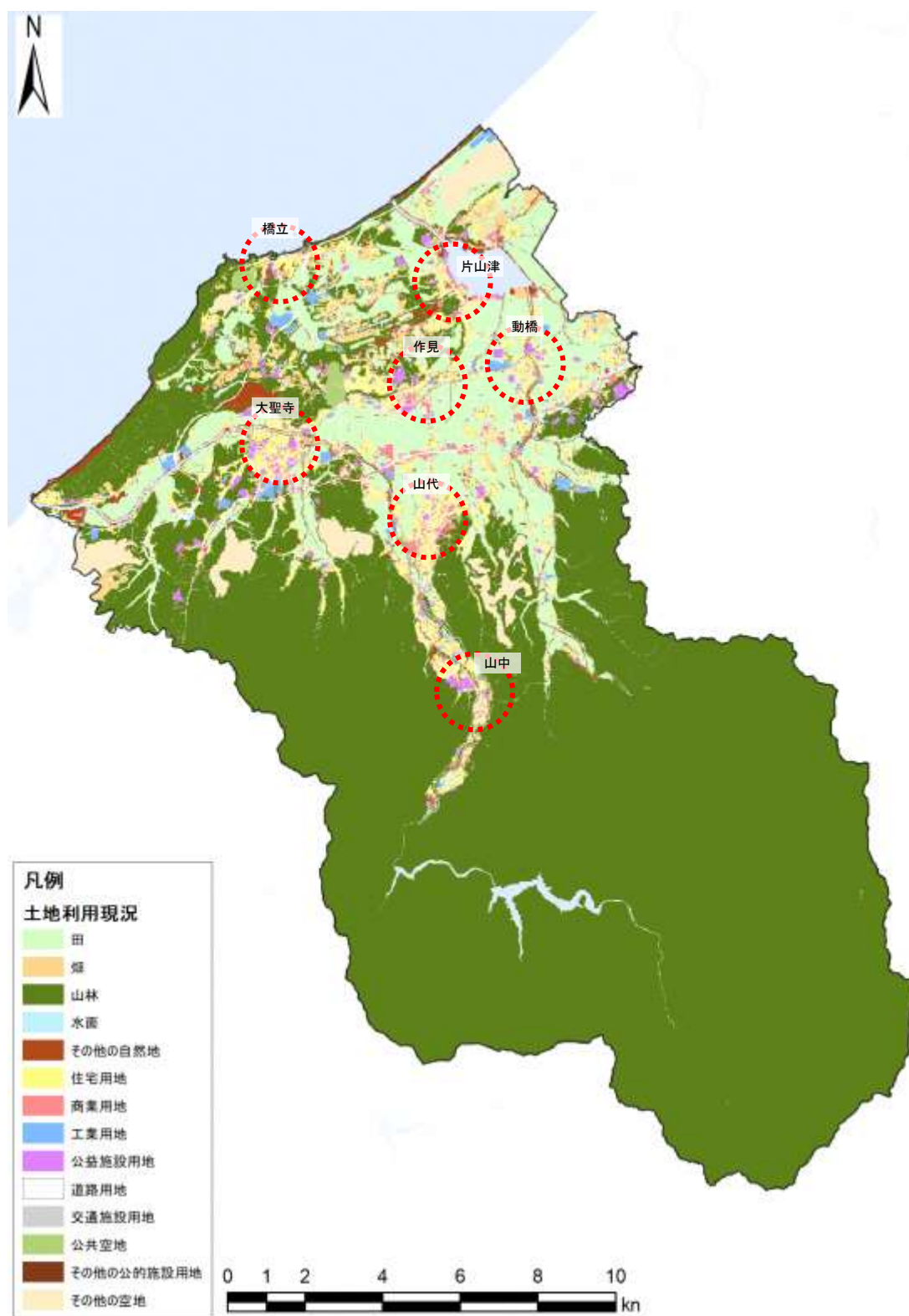
藩政期からの行政の中心地である大聖寺、山代・山中・片山津の3つの温泉地、宿場町のおもかげを残す動橋、漁業で栄える橋立のほか、加賀温泉駅がある作見の新しい市街地が分散している。各市街地を連絡するように交通軸が形成され、沿線には商業施設や事業所が立地している。



地目別土地利用面積の割合 （平成 27 年（2015）度）

※石川県森林計画及び課税対象地の地目別土地利用面積から作成

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景



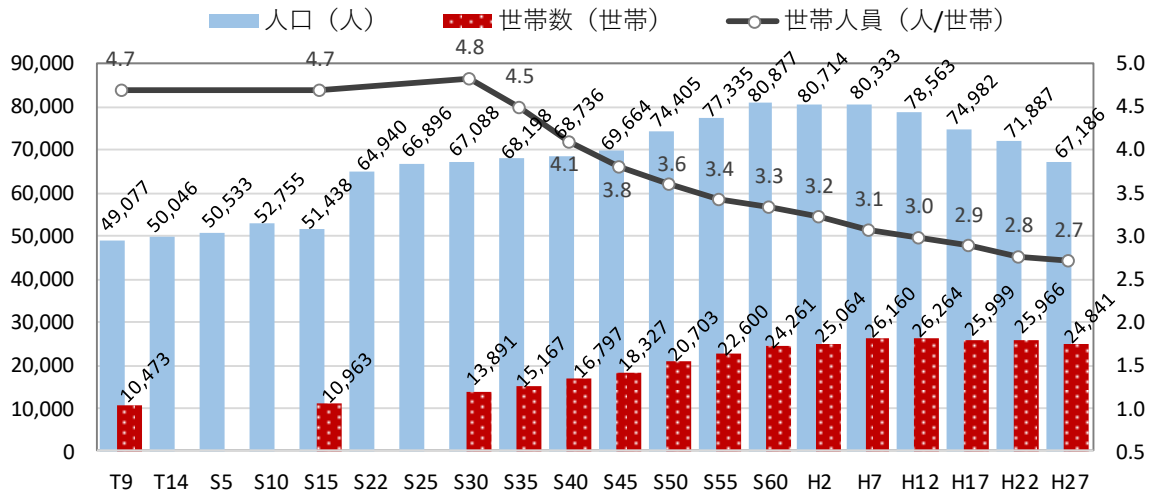
土地利用現況図

※加賀市都市計画基礎調査より作成

(3) 人口動態

1) 過去の人口推移

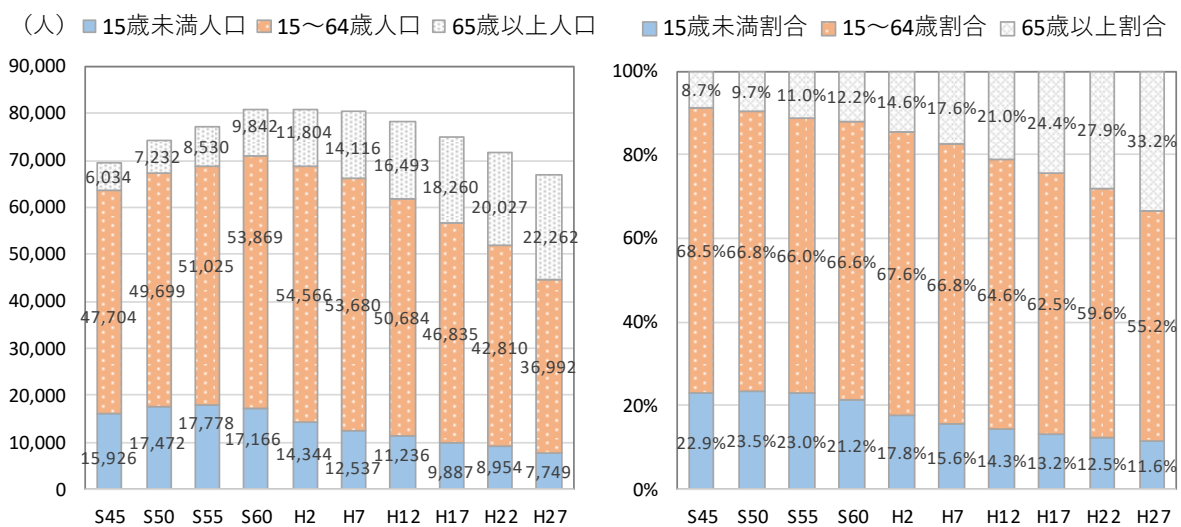
平成27年(2015)の国勢調査では、加賀市の人口は約6万7000人であり、昭和60年(1985)をピークに人口減少が続き、ピークからの30年間で約1万4000人の減少(17%の減少)がみられ、近年は減少数が大きくなっている。また、世帯数は平成12年(2000)から減少に転じている。



加賀市の人口推移

※加賀市統計資料より作成

年少人口(15歳未満)は昭和55年(1980)、生産年齢人口(15~64歳)は平成2年(1990)をピークに減少が続いている。高齢化率(65歳以上割合)は平成27年(2015)で30%を超え33.2%となり、少子高齢化が進行している状況にある。



年齢3区分人口の推移

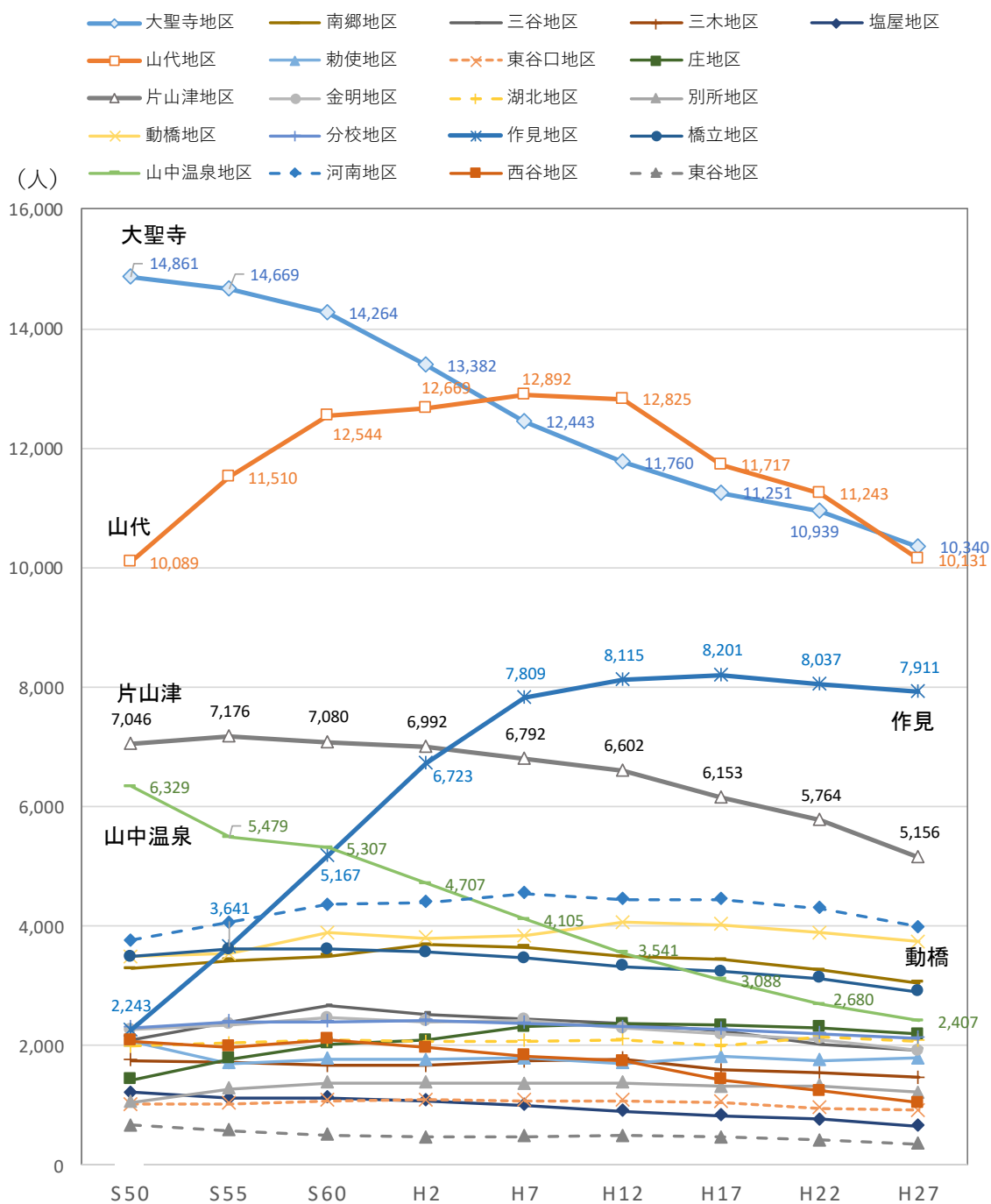
年齢3区分人口割合の推移

※加賀市統計資料より作成

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

地区別でみた場合、昭和50年（1975）に市内で最も人口の多かった大聖寺地区は一貫して減少が続いており、山中温泉地区においても昭和50年から減少が続いている。片山津地区は昭和60年（1985）から減少しており、平成7年（1995）まで増加していた山代地区は平成12年（2000）から減少に転じている。

作見地区は人口の増加が続いていたが、平成17年（2005）をピークに横ばい傾向になっている。また、その他の地区については、人口は大きくは減少していない状況である。



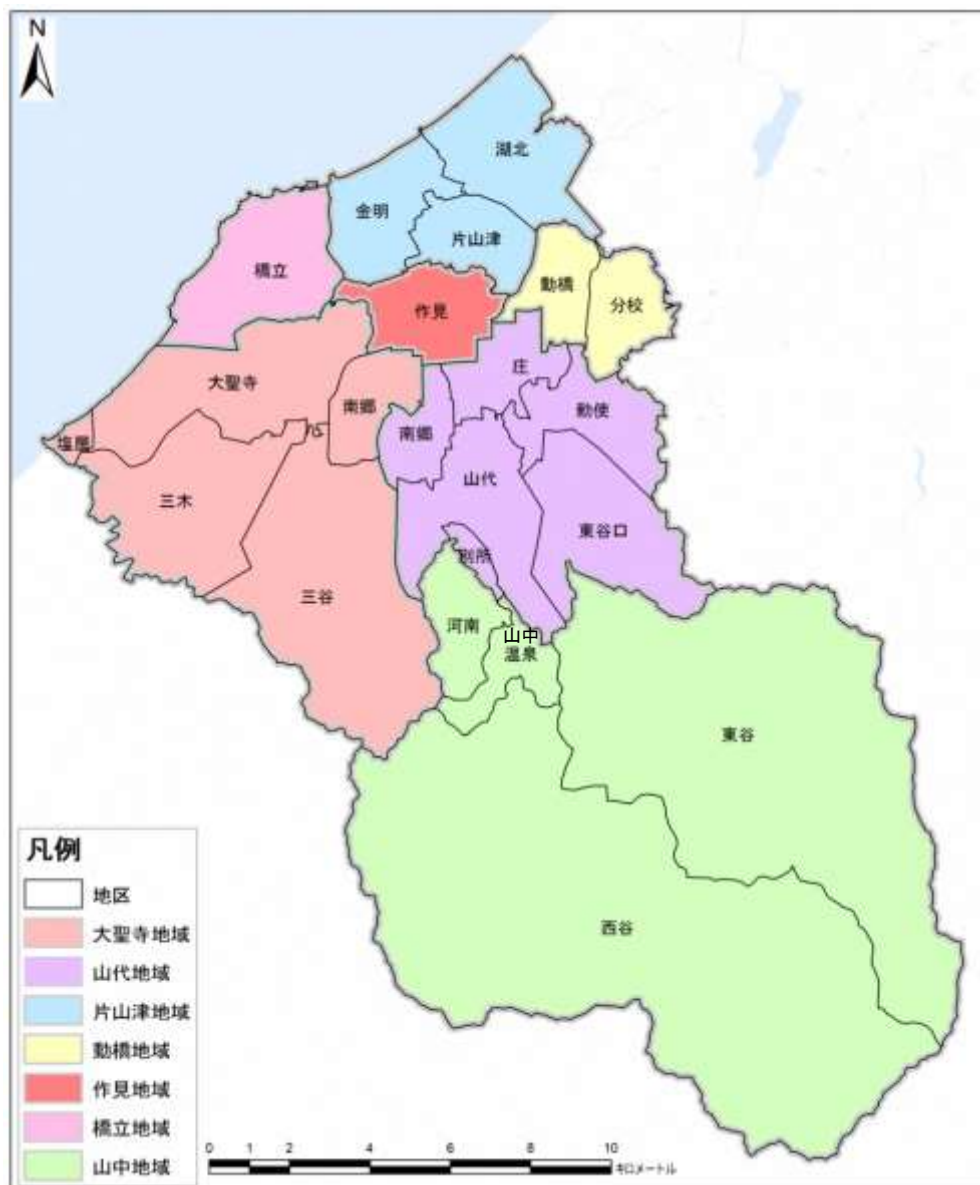
地区別の人口推移

※加賀市統計資料より作成

地 域	地区・町
だいしょうじ 大聖寺	大聖寺地区
	なんごう 南郷地区 (南郷・下河崎・上河崎・吸坂町)
	三谷地区
	みき 三木地区
	しおや 塩屋地区
やましろ 山代	山代地区
	ちよくし 勅使地区
	ひがしたにぐち 東谷口地区
	しょう 庄地区
	南郷地区 (くろせ ほうが なかだいまち 黒瀬・保賀・中代町)
	別所地区

地 域	地区・町
かたやまつ 片山津	片山津地区
	きんめい 金明地区
いぶり はし 動橋	湖北地区
	動橋地区
ぶんぎょう 分校地区	分校地区
さく み 作見	作見地区
はし たて 橋立	橋立地区
やま なか 山中	山中温泉地区
	かわみなみ 河南地区
	にしに 西谷地区
	ひがしたに 東谷地区

※南郷地区は大聖寺地域と山代地域にまたがっている

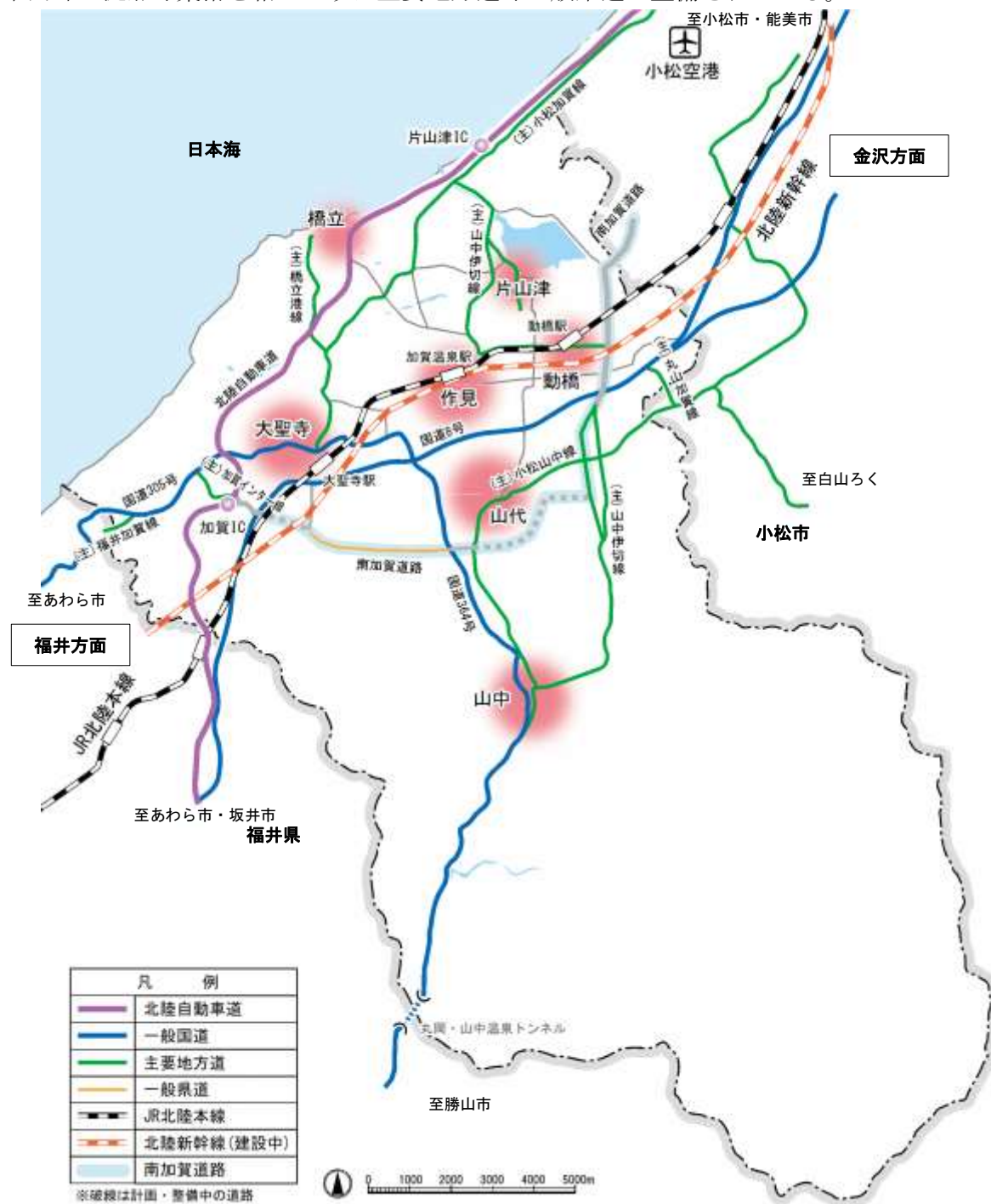


地域区分図

(4) 交通機関

1) 道路

北陸自動車道の片山津・加賀両インターチェンジをはじめ、隣接市を連絡する国道8号・305号・364号、市内各地域を結ぶ主要地方道山中伊切線などにより幹線道路網が形成されている。北陸自動車道と国道8号は、広域的には関西と北陸を結ぶ大動脈であり、近隣では加賀市と金沢市や福井市などを結んでいる。また、南加賀道路は国道8号のサブルート化及び山代温泉や山中温泉などへのアクセス向上を目的に、現在、整備が進められている。その他、市内外の拠点や集落を結ぶように主要地方道や一般県道が整備されている。



道路ネットワーク図

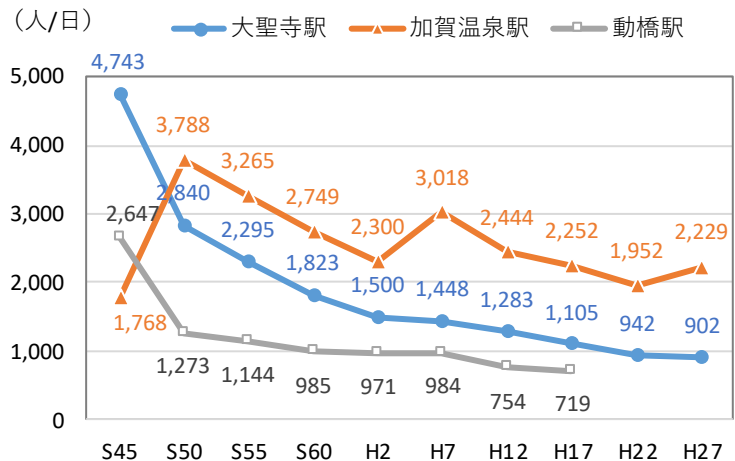
2) 公共交通

①北陸新幹線

北陸新幹線は、東京－大阪間を結ぶ路線として、国の整備計画が決定されており、現在は東京－金沢間（東京－高崎間は上越新幹線と共用）が開業している。令和6年（2024）開業予定である金沢・敦賀間の整備が進められており、加賀温泉駅に併設して新幹線駅が設置される。

②鉄道

JR 北陸本線が市中央を横断しており、市内には大聖寺駅、加賀温泉駅（昭和45年（1970）までは作見駅）、動橋駅がある。鉄道利用の状況は、大聖寺駅・動橋駅は減少が続いているが、一方で加賀温泉駅については平成27年（2015）に増加に転じている。



鉄道駅の利用状況の推移

※加賀市統計資料より作成

※動橋駅はH22以降無人化のためデータなし

③バス・タクシー等

路線バスは、乗客数の減少により、平成20年（2008）に大半の路線が廃止された。現在の路線バスルートは「温泉大聖寺線」「吉崎線」「温泉山中線」「温泉片山津線」「山代大聖寺線」の5路線及び観光周遊バス「キャン・バス」が地域バス路線として運行する「片山津・橋立循環線」の1路線で運行されている。

また、平成27年（2015）10月からは市が市内全域（3エリア）で乗合タクシー「のりあい号」を運行している。また、「キャン・バス」の観光周遊路線「海まわり線」「山まわり線」の市民利用なども進めている。

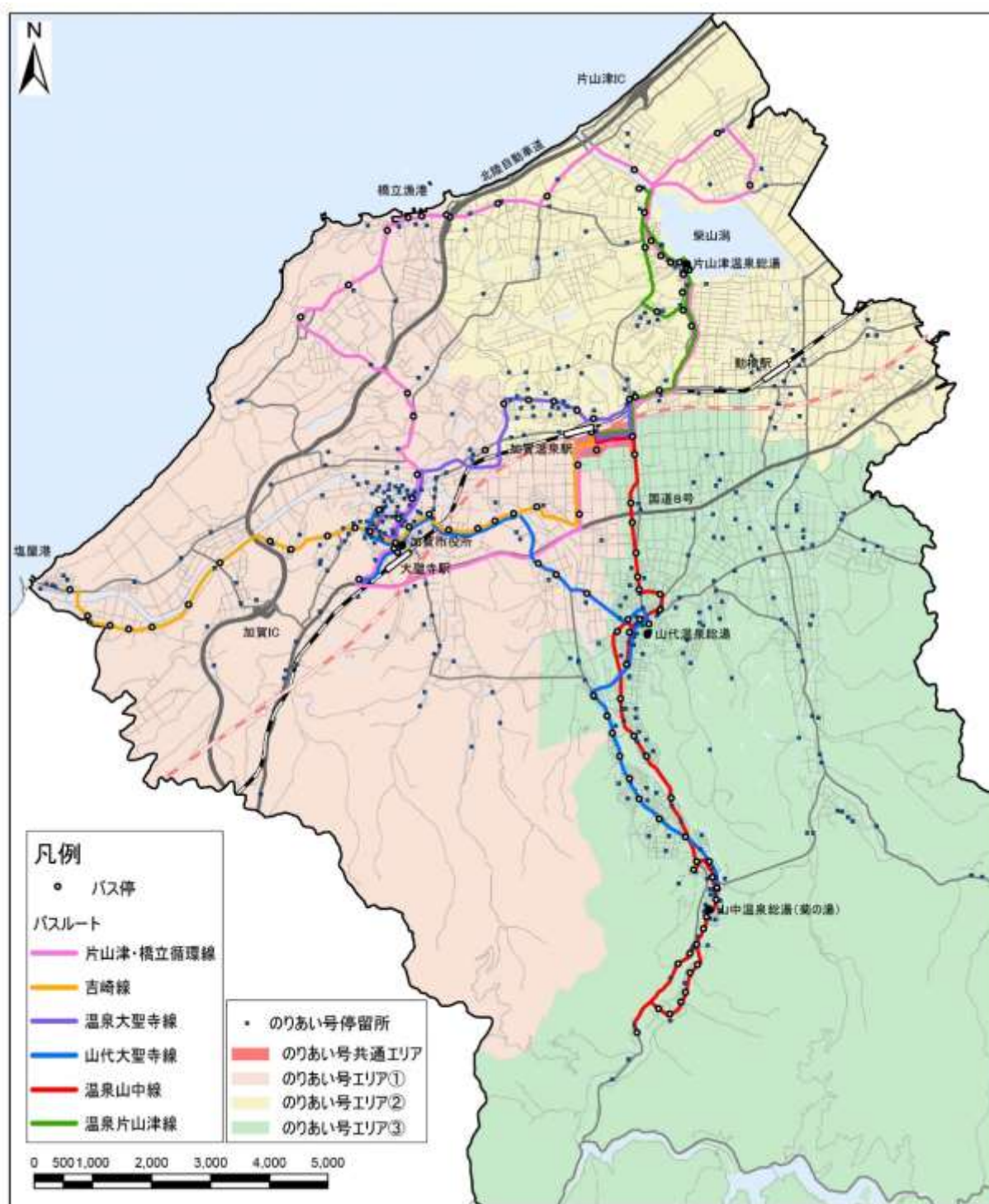


のりあい号



キャン・バス

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景



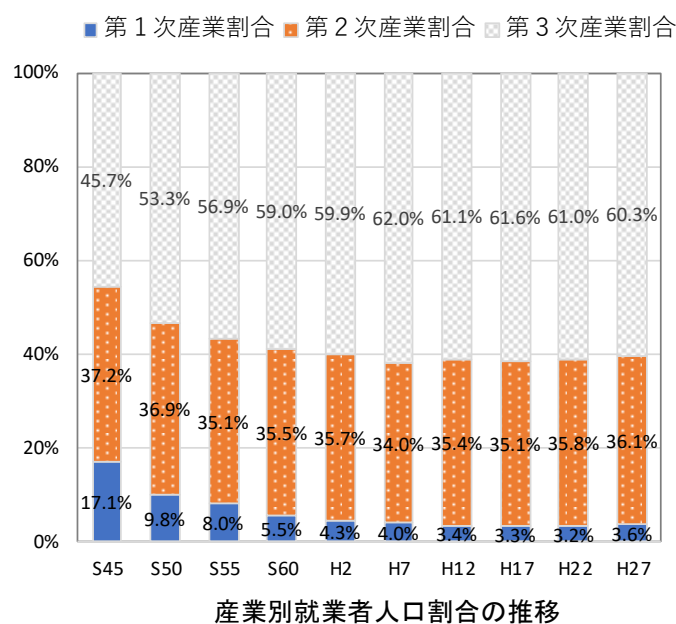
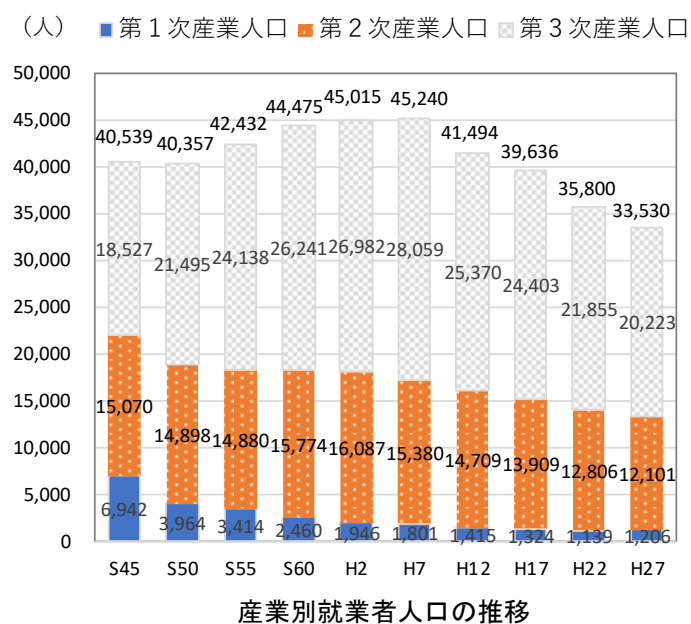
バス停とバスルート（平成30年時点）

※加賀市庁内資料より作成

(5) 産業

1) 産業構造

国勢調査による産業別の人口構造をみると、第1次産業人口は減少が続き、第2次産業人口は平成2年（1990）、第3次産業人口は平成7年（1995）をピークに減少しており、これらを合計した総就業者人口は平成7年をピークに減少がみられる。産業人口の内訳は、昭和45年（1970）から昭和50年（1975）にかけて第1次産業の割合が大きく減少する一方で、第3次産業は増加したが、近年では大きな割合の変化はみられず、平成27年（2015）では第3次産業が60.3%、第2次産業が36.1%となっている。



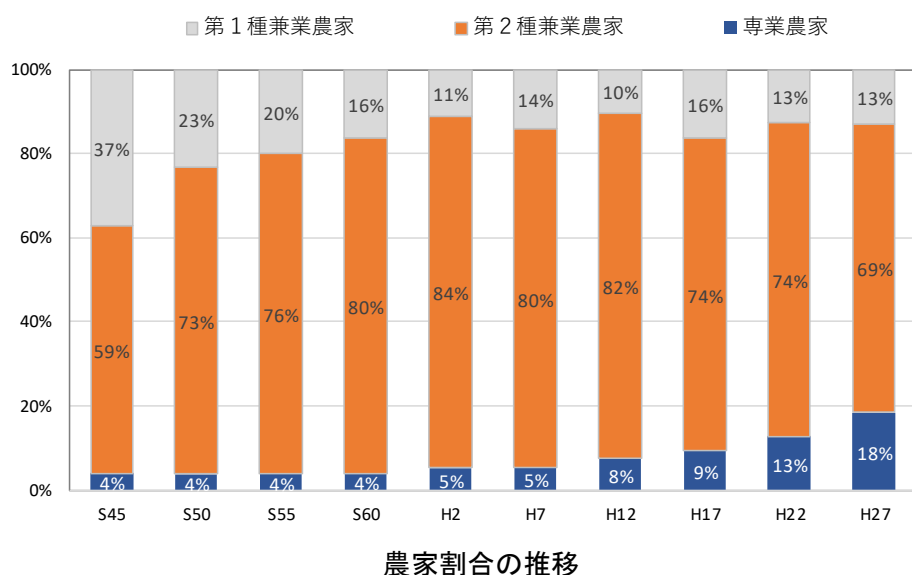
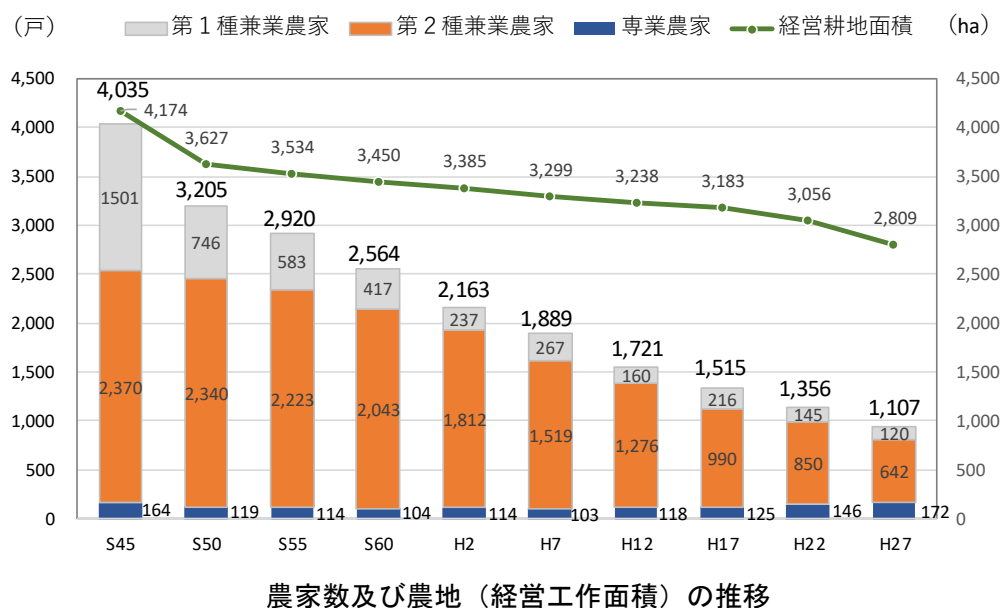
※加賀市統計資料より作成

2) 農林水産業（第1次産業）

①農業

農家数は減少が続いており、昭和45年（1970）からの45年間で2,928戸（73%）減少している一方で、専業農家は戸数、割合ともに平成12年（2000）から増加傾向にある。また、経営耕地は減少が続き、昭和45年からの45年間で1,365ha（33%）減少し、近年では平成22年（2010）からの5年間で247ha減が顕著である。

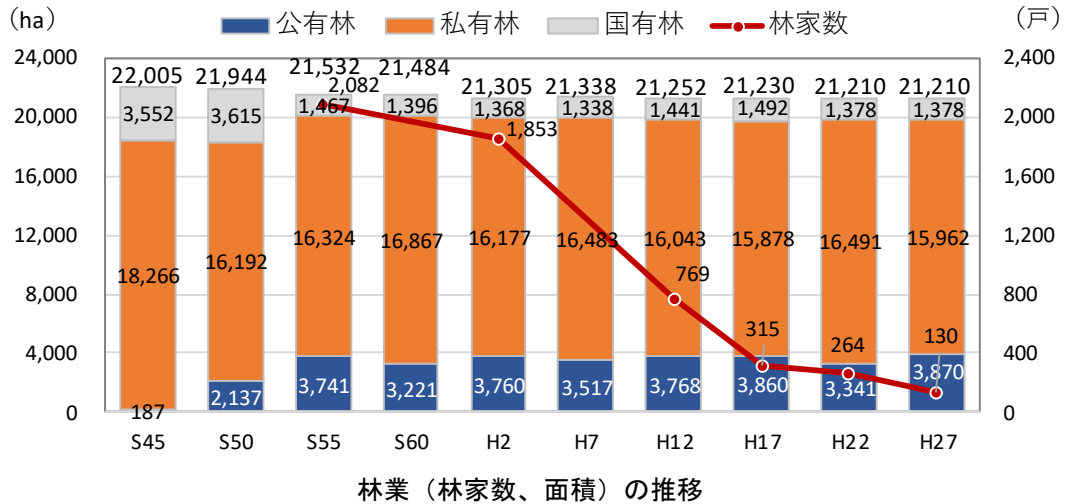
加賀市の農産物は、平野部の稲作をはじめ、ブロッコリー、トマトなどの野菜栽培、丘陵部では梨、ぶどうなどの果樹栽培、山間部では自然薯などが盛んである。



※加賀市統計資料より作成

②林業

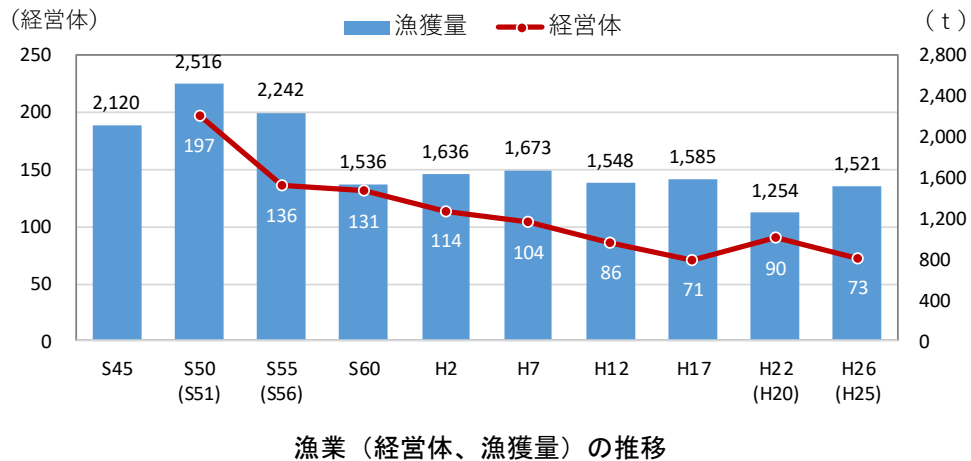
林家数は大きく減少し、平成27年（2015）では130戸にまで減少している。
林野面積についてはわずかな減少傾向となっている。



※加賀市統計資料より作成

③漁業

加賀市は加能ガニ（ズワイガニの雄）や香箱ガニ（ズワイガニの雌）が主な特産であるが、市内の漁港の経営体は減少傾向にある一方、漁獲量は昭和50年（1975）から昭和60年（1985）にかけて減少して以降は、横ばいとなっている。

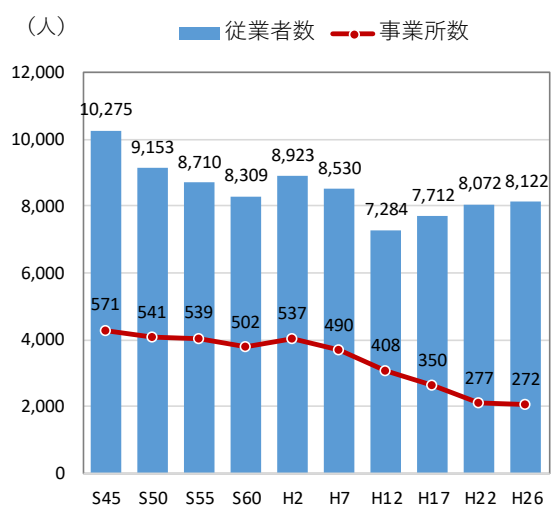


※加賀市統計資料より作成
※（ ）は、経営体の調査年

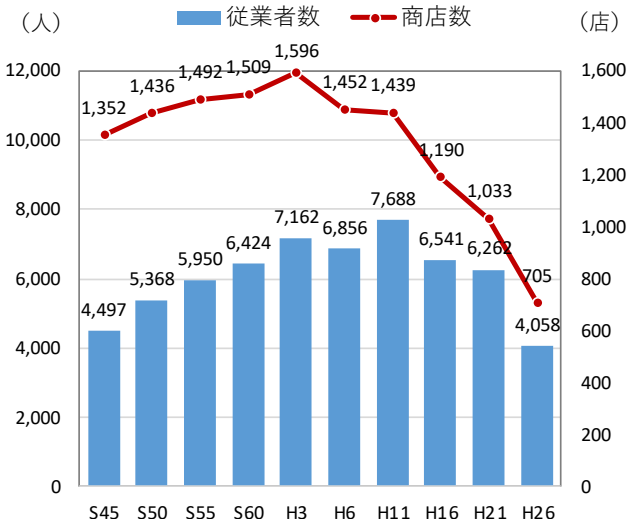
第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

3) 商工業

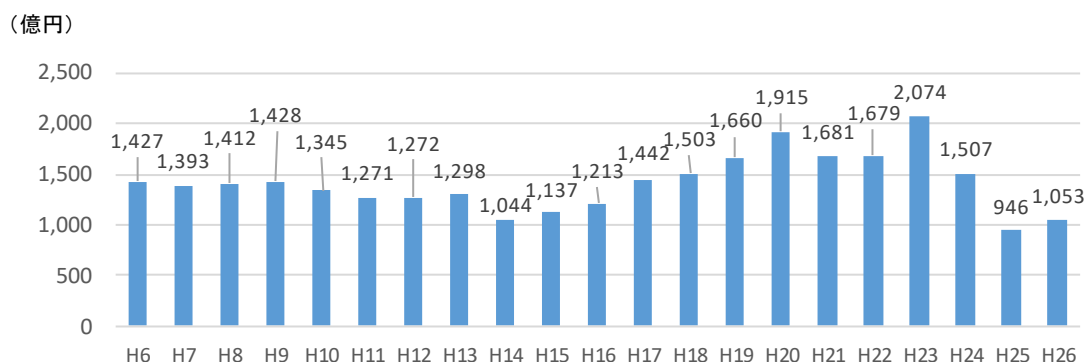
工業については、事業所数は減少しているものの、従業者数は平成17年（2005）から若干増加傾向にある。商業については、市街地の店舗が撤退し、沿道型大規模店舗が立地すること等により、商店数は平成3年（1991）をピークに、従業者数は平成11年（1999）をピークに減少し、特に平成21年（2009）から平成26年（2014）にかけての減少が顕著にみられる。



工業（事業所数、従業員数等）の推移
（4人以上の工場を対象）

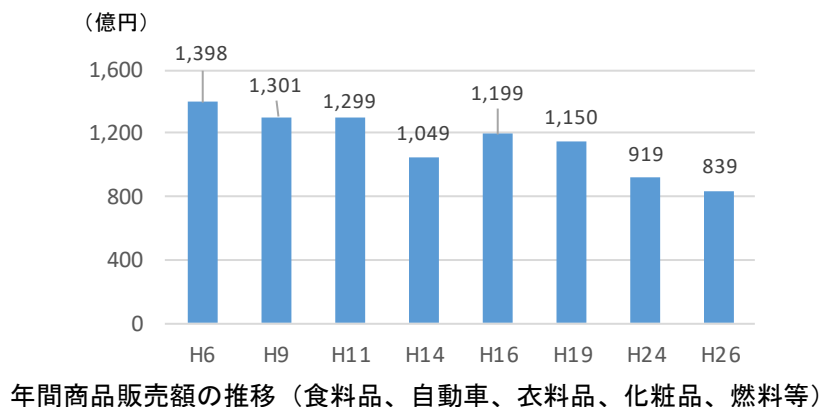


商業（商店数、従業員数等）の推移



製造品出荷額等の推移（金属製品、電子部品、生産用機械器、輸送機械器具等）

※加賀市統計資料より作成

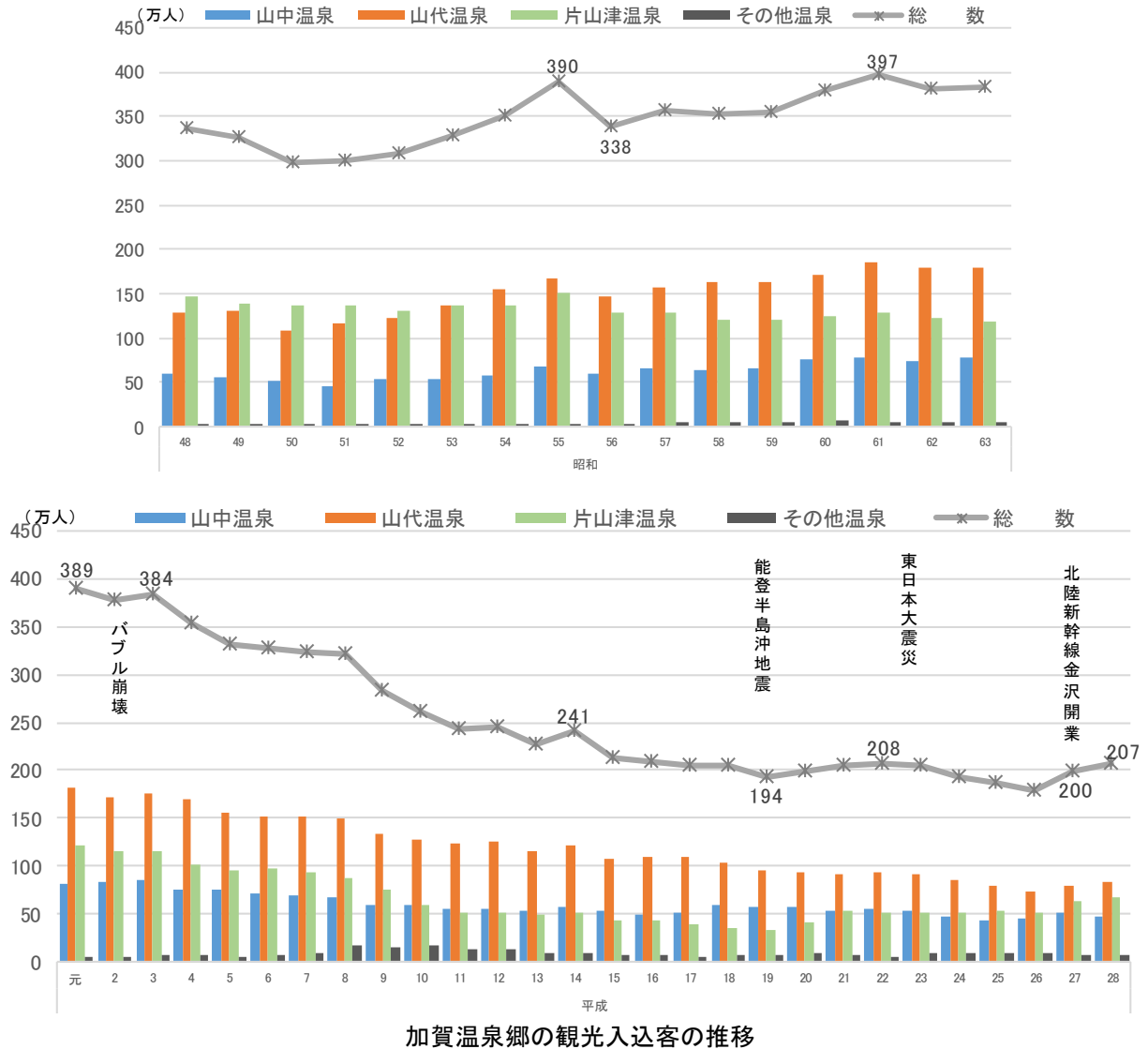


年間商品販売額の推移（食料品、自動車、衣料品、化粧品、燃料等）

※加賀市統計資料より作成

(6) 観光

加賀市の観光入込客数は、バブル崩壊以降、大きく減少してきた。近年は年間 200 万人ほどで横ばいであるが、平成 27 年（2015）の北陸新幹線の東京—金沢間開業以降、増加傾向である。また、令和 6 年（2024）に北陸新幹線加賀温泉駅が開業予定であり、さらに増加することが期待される。



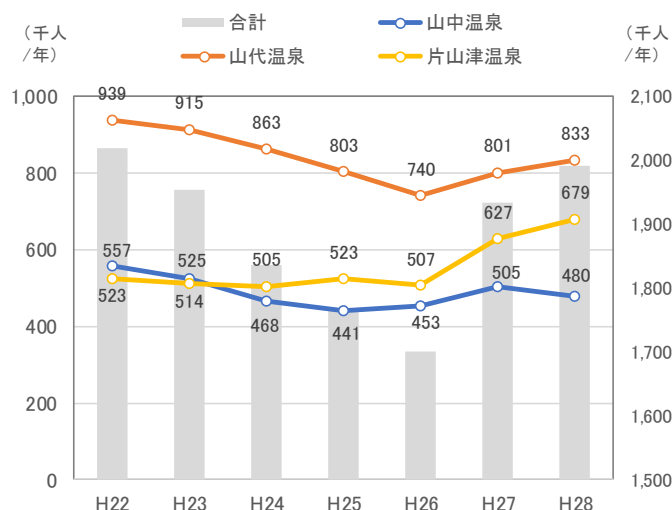
※加賀市統計資料より作成

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

1) 温泉

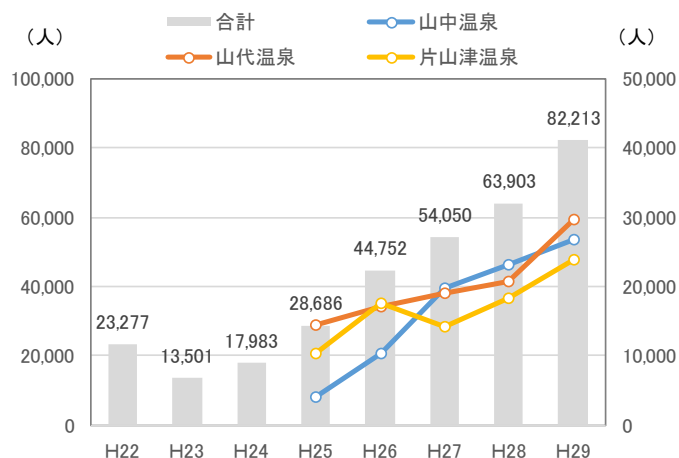
加賀市は、山代温泉、山中温泉、片山津温泉といった温泉地に恵まれており、宿泊業をはじめとした観光業が盛んである。各温泉地には温泉旅館が立ち並ぶほかに、「総湯」と呼ばれる共同浴場があり、地域住民や観光客などに広く利用されている。

市内3温泉の観光入込客数は、山代温泉と山中温泉は平成3年(1991)をピークに減少が続いているが、山中温泉は平成17年(2005)から横ばい傾向にある。また、片山津温泉は昭和55年(1980)をピークに減少が続いているが、平成22年(2010)から増加傾向にある。宿泊入込客数も同様の傾向にある。



3温泉への宿泊施設入込客数の推移 ※加賀市統計資料より作成

市内3温泉の外国人宿泊客数は近年著しく増加しており、平成29年(2017)は同22年(2010)に比べ4倍近い増加となっている。なお、上記の全宿泊施設入込客数では山代温泉が他の2温泉より多くなっているが、外国人宿泊客数の場合は3温泉で大きな差が見られない。



3温泉の外国人宿泊客数の推移 ※加賀市統計資料より作成



山代温泉古総湯



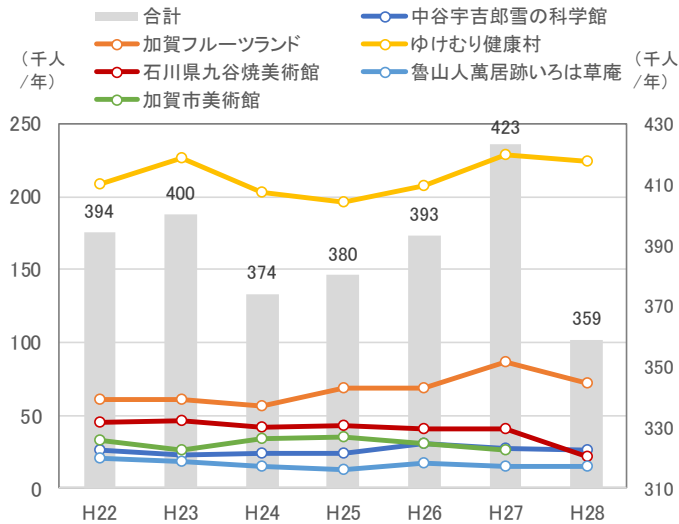
山中温泉総湯(菊の湯・女湯)



片山津温泉総湯

2) 観光施設

市内の主要観光施設の利用者数は、概ね横ばいである。山中温泉の「ゆけむり健康村」の利用者数が最も多く、「加賀フルーツランド」が続く。



主要観光施設への施設入込客数の推移

※加賀市統計資料より作成



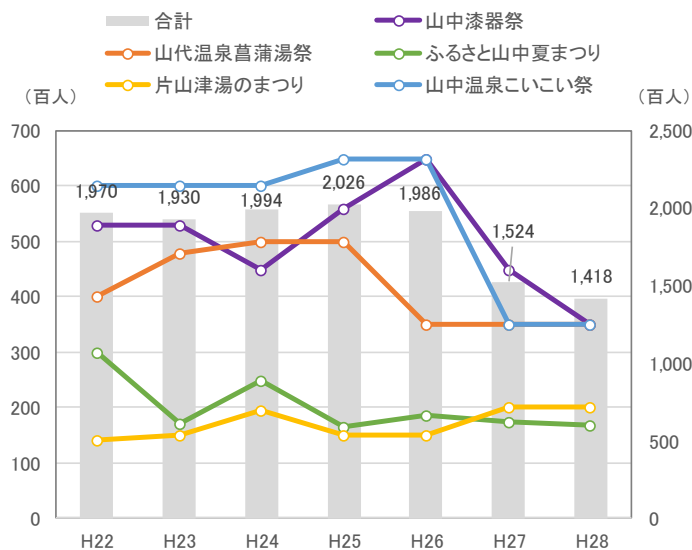
ゆけむり健康村



加賀フルーツランド

3) イベント

市内で開催されている主なイベントの来場者数は、山中漆器祭、山代温泉菖蒲湯まつり、山中温泉こいこい祭において、この2～3年で減少している。一方、ふるさと山中夏まつりや片山津温泉湯のまつりは、他の3イベントよりも来場者数が少ないものの、増減が少ない。



イベント入込客数の推移

※加賀市統計資料より作成



山中漆器祭



山代温泉菖蒲湯まつり



片山津温泉湯のまつり

3. 歴史的環境

(1) 歴史

1) 縄文時代～弥生時代

a. 縄文時代

加賀市に人が住むようになったのは旧石器時代とされ、^{みやじむかいやま}宮地向山遺跡が残っている。縄文時代では、遺跡や遺物などの^{さんぶち}散布地を中心に市内で70箇所程度の遺跡が確認され、特に海岸から^{しばやまがた}柴山潟の沿岸、^{やますそぶ}丘陵山地の山裾部を中心に分布している。

○ 日本海沿岸や柴山潟における暮らしの展開

- ・ 縄文早期の遺跡は日本海から^{しばやまがた}柴山潟沿岸（片山津地域内）に分布し、また、縄文前期から中期には柴山潟沿岸に貝塚が見られる。主に柴山潟や日本海に程近い低地や台地に集落跡が分布していることから、^{ぎょうろう}漁撈（魚介類や海藻などを採ること）を中心とした採取生活が営まれていたことが分かる。

○ 山地における暮らしの展開

- ・ 山地では大聖寺川と動橋川に沿った河岸段丘や谷底平野において、縄文中期から後期における集落が確認され、狩猟や漁撈を中心とした生活が営まれていたと考えられている。

b. 弥生時代

弥生時代には、前期から中期に至り稲作が徐々に波及し、後期には柴山潟沿岸の低地において水田稲作を中心とする暮らしが営まれるようになっていった。

○ 柴山潟周辺における稲作の展開

- ・ 江沼地方（旧大聖寺藩領に該当し、現在の加賀市と小松市南西部の一部）における弥生前期から中期の遺跡である^{しばやま で むら}柴山出村遺跡、^{しばやますいてい}柴山水底遺跡では、柴山潟沿岸の湿地をそのまま利用した原始的な稲作が取り入れられた。
- ・ 弥生後期には八日市川から柴山潟沿岸の広い地域にまたがる「北陸の^{とろ}登呂遺跡」とも称される^{ねこばし}猫橋遺跡があり、稲作を行う大規模な集落が営まれていた。方形周溝墓も確認されており、すでに村を統率する首長が存在していたことが分かる。玉造りも行われていた。

c. 文化の伝播

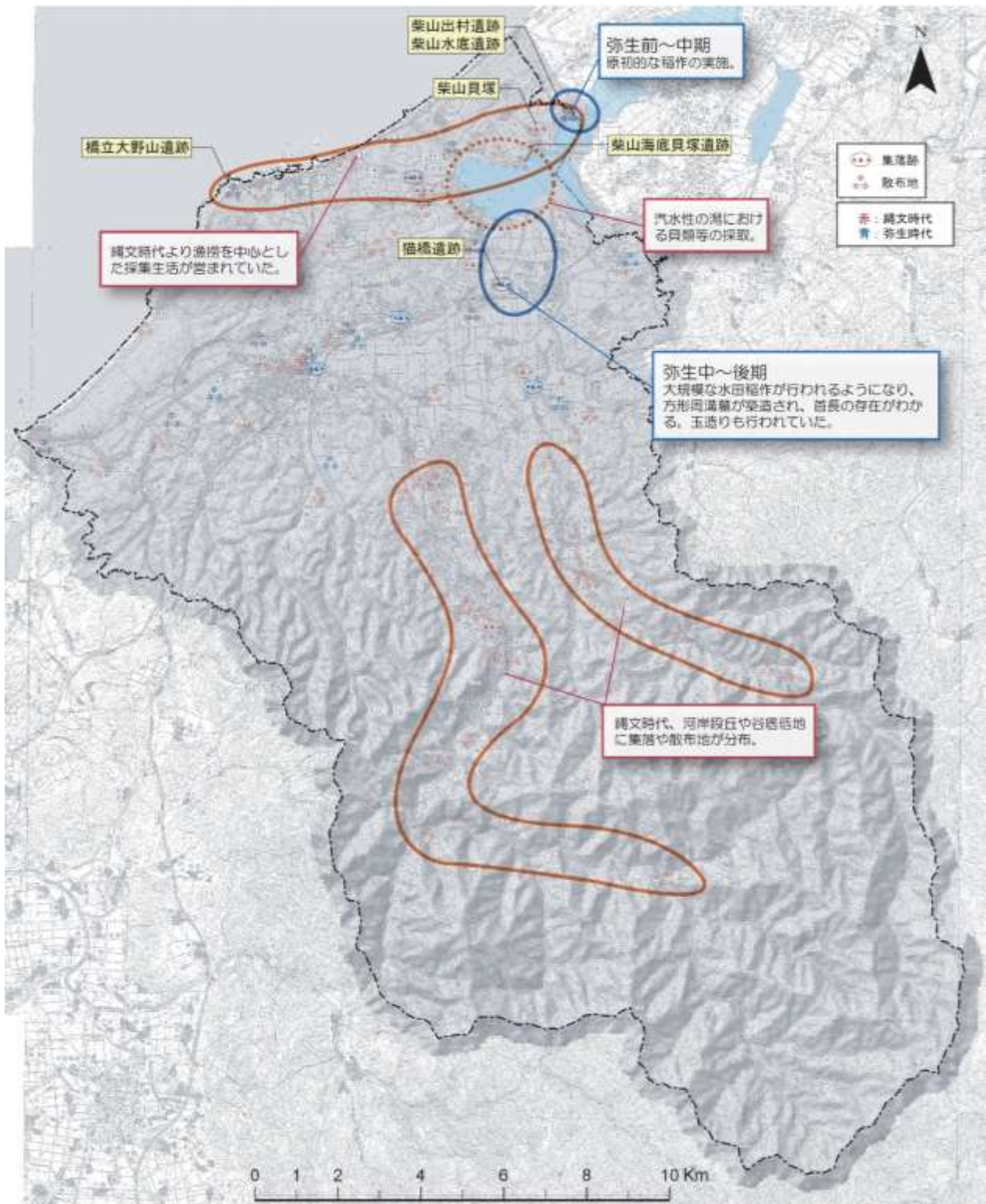
○ 東西文化の接点

- ・ 縄文早期の^{はしたておおのやま}橋立大野山遺跡等から発見された楕円押型文の土器片は、近畿地方の強い影響を表している。
- ・ 縄文時代の土器の形状は、近畿地方や関東、東北の影響を受けながら、中期には北陸独自の形状を生み出してきた。その後は東日本や近畿地方の影響を受けるなど、縄文時代を通して常に東西文化の接点であり、そのなかで独自の文化が作り上げられた。

○ 山陰文化圏との交流

- ・ 猫橋遺跡や二子塚遺跡など、弥生時代後期の遺跡から出土する土器は山陰地方のものと類似している。また、玉造りの技術や農耕文化など共通する文化が多く、日本海の海上ルートを通じた山陰文化圏との活発な交流が推察できる。

第1章 加賀市の歴史的風致形成の背景



※加賀三湖（柴山潟、木場潟、今江潟）は、明治期の範囲を水色で示す

埋蔵文化財包蔵地の分布（原始）

※加賀市歴史文化基本構想より

2) 古墳時代

a. 古墳時代（4世紀～7世紀後半）

○ 玉造り^{こうじん}工人集団の成立

- ・古墳時代に至って、玉類や石製品が支配権威の象徴としての意味を持つようになり、4世紀前半ごろから^{かたやま づ たまづくり}片山津玉造遺跡（市指定の史跡）等において大量の製品が生産されるようになった。北陸の玉造り技術は、日本海の海上ルートにより、特に山陰文化圏との交流によってもたらされたとする説もある。
- ・片山津玉造遺跡は、4世紀前半の専門的な工人の工房集落で、江沼地方で玉造りが行われていたことを表す遺跡であり、5世紀後半に姿を消す。

○ 江沼^{えぬのおみ}臣の台頭

- ・江沼地方の古墳の築造は、確認できる限り、動橋川水系の分校地区や柴山潟に注ぐ八日市川^{こすなみ}北岸の小菅波^{こすなみ}周辺において4世紀初めごろから始まる。
- ・やがて大聖寺川水系へと展開し、5世紀後半の^{きつねやま}狐山古墳（国指定の史跡）で最盛期を迎える。その後は^{とみつか}富塚地区や柴山潟の北東（小松市三湖台周辺）へと移動し、6世紀後半から勅使地区をはじめとする丘陵部では横穴の群集墓へと変貌する。
- ・^{きつねやま}狐山古墳は、畿内の墓のスタイルを有する。5世紀後半の全長55mの前方後円墳で、江沼地方の統治に成功した江沼臣の墓と推定される。
- ・古墳の立地をみると、江沼平野を取り囲む丘陵地に、多くの古墳群が確認され、おもに河川の周辺地区に集中して造られている。標高ではおよそ5～70mに分布し、60%以上が丘陵地に立地する。
- ・狐山古墳が出現したころ、村々のなかで有力な家とそうでないものの差が広がり、江沼臣と呼ばれる首長となる豪族が現れた。6世紀後半には、加賀地方の手取川を境とする南側を江沼臣が統治した。江沼臣は、6世紀初頭に現れたオホド王（継体天皇）の外戚といわれ、加賀の他の豪族に比べ、中央の大和王権との接触に積極的で、大和朝廷から身分を表すカバネ（称号）として^{おみ}臣を名乗ることが許された。



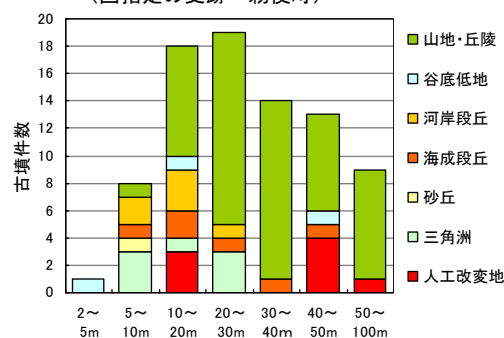
片山津玉造遺跡（田下に分布）
（市指定の史跡・片山津町）
柴山潟に程近い標高30m程の台地上



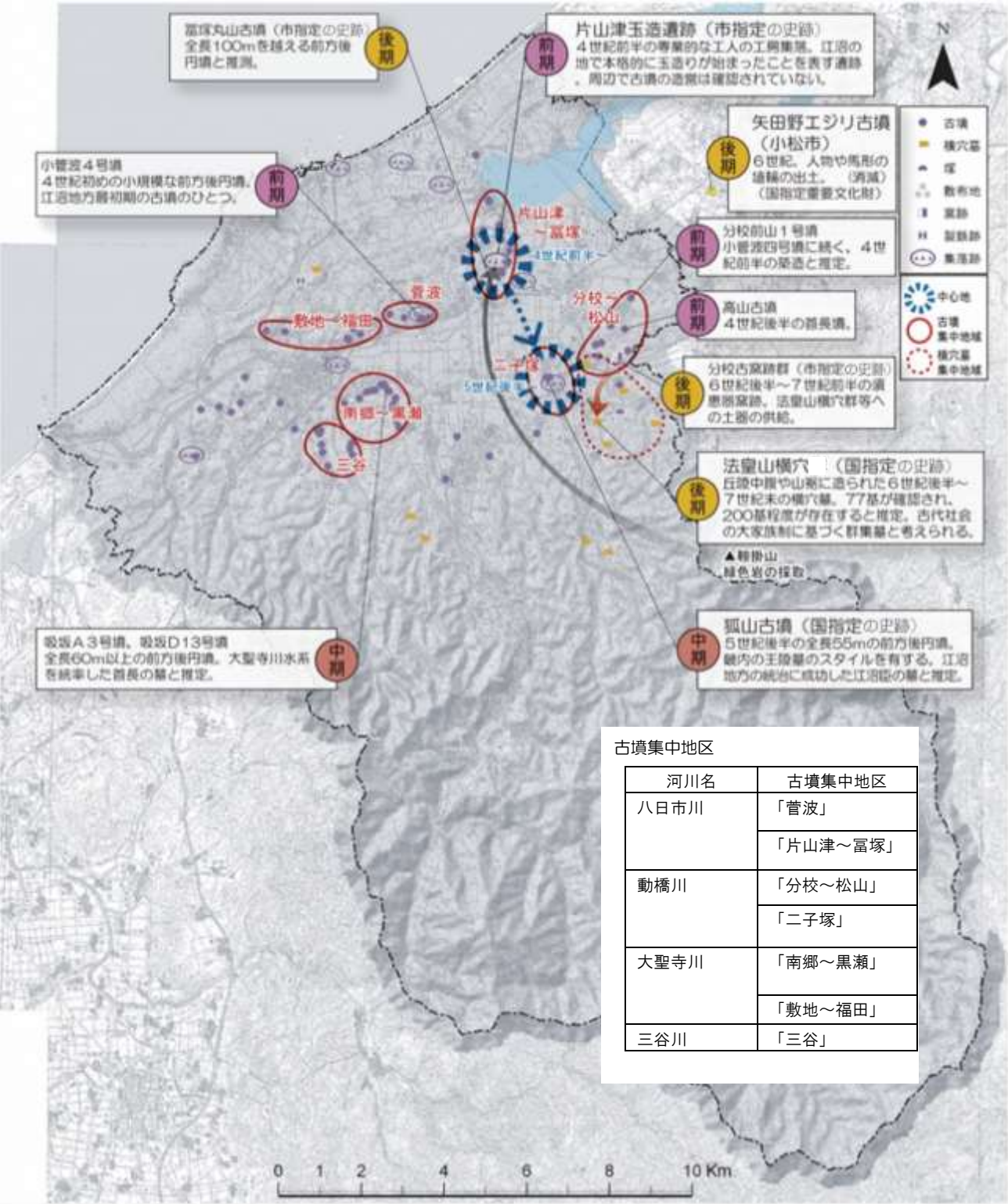
狐山古墳（国指定の史跡・二子塚町）
河岸段丘突端の平坦地に分布



ほうおうざんよこあな
法皇山横穴古墳
（国指定の史跡・勅使町）



加賀市における古墳の立地分析



古墳時代における遺跡の分布と変遷

※加賀市歴史文化基本構想より

b. 平安時代（9世紀～12世紀）

平安初期に至り、越前国より加賀国が独立し、江沼郡 14 郷のうち、東側の 5 郷が能美郡に分割された。

○ 在地土豪の台頭と庄園の開発

- ・公地公民制の崩壊により額田^{ぬかたのしょう}庄^{くまさかのしょう}や熊坂^{くまざかのしょう}庄^{くまざかのしょう}等の庄園が開かれるとともに、土着した国司の末裔^{まつえい}である大江氏^{えい}や藤原氏^{おおえ}等が在地の領主として勢力を伸ばした。

○ 白山信仰体系の確立

- ・古来白山への信仰は、仏教思想と結びついて形成され、加賀・越前・美濃の三馬場を中心とする祭祀組織が確立していった。加賀国では、手取川流域である石川郡（加賀郡）に本宮加賀白山比咩神社^{やまひめ}をはじめとする白山七社が整備され、信仰の拠点となった。

加賀国における白山信仰拠点

石川郡 (加賀郡)	本宮加賀白山比咩神社、三宮、金剣宮、岩本宮（白山四社） 中宮、佐羅宮、別宮（以上をあわせ白山七社）
能美郡	護国寺・昌隆寺・松谷寺・蓮花寺・善興寺・長寛寺・涌泉寺・隆明寺（中宮八院）
江沼郡	那谷寺 ^{な た でら} ・栄谷寺 ^{さかえだにでら} ・宇谷寺 ^{う だにでら} （白山三箇寺） ※那谷寺を除き全て加賀市内 大聖寺・極楽寺・小野（坂）寺 ^{おんせんじ} ・温泉寺 ^{かしのてら} ・柏野寺（白山五院）

- ・江沼郡では、白山の信仰拠点として、白山三箇寺と白山五院が設けられた。信仰のあり方から捉えると、白山五院のうち大聖寺・極楽寺・小野（坂）寺は白山を仰ぐ遥拝（遠く隔てたところから拝むこと）の場、五院のうち柏野寺・温泉寺、白山三箇寺の那谷寺・栄谷寺・宇谷寺は白山に登頂する起点となる登拝（神の徳を受けながら登ること）の場として見ることができる。
- ・江沼郡内から白山に登拝するルートは、大聖寺川から動橋川流域を溯り、大日山に到達して、県境の尾根伝いに白山に至るルートが一般的であったと推定される。大日山の呼称は、白山から見て春・秋分の日には太陽が沈む方向近くに存在することに因むと推察される。
- ・山代温泉の薬王院は、白山五院の温泉寺の後身と伝えられ、当地における温泉の開基と信仰の関係を示唆する。
- ・極楽寺旧蔵といわれる「絹本 著 色 十一面観音図」「絹本 著 色 阿弥陀如来来迎図」（共に市指定の文化財）が伝来するが、これらは市内において中世まで遡る数少ない仏教絵画であり、十一面観音は白山大御前^{おおごぜん}、阿弥陀如来は白山大汝峰^{おおなんじみね}の本地仏とされており、当市における白山信仰の流れを知り得る貴重な資料である。

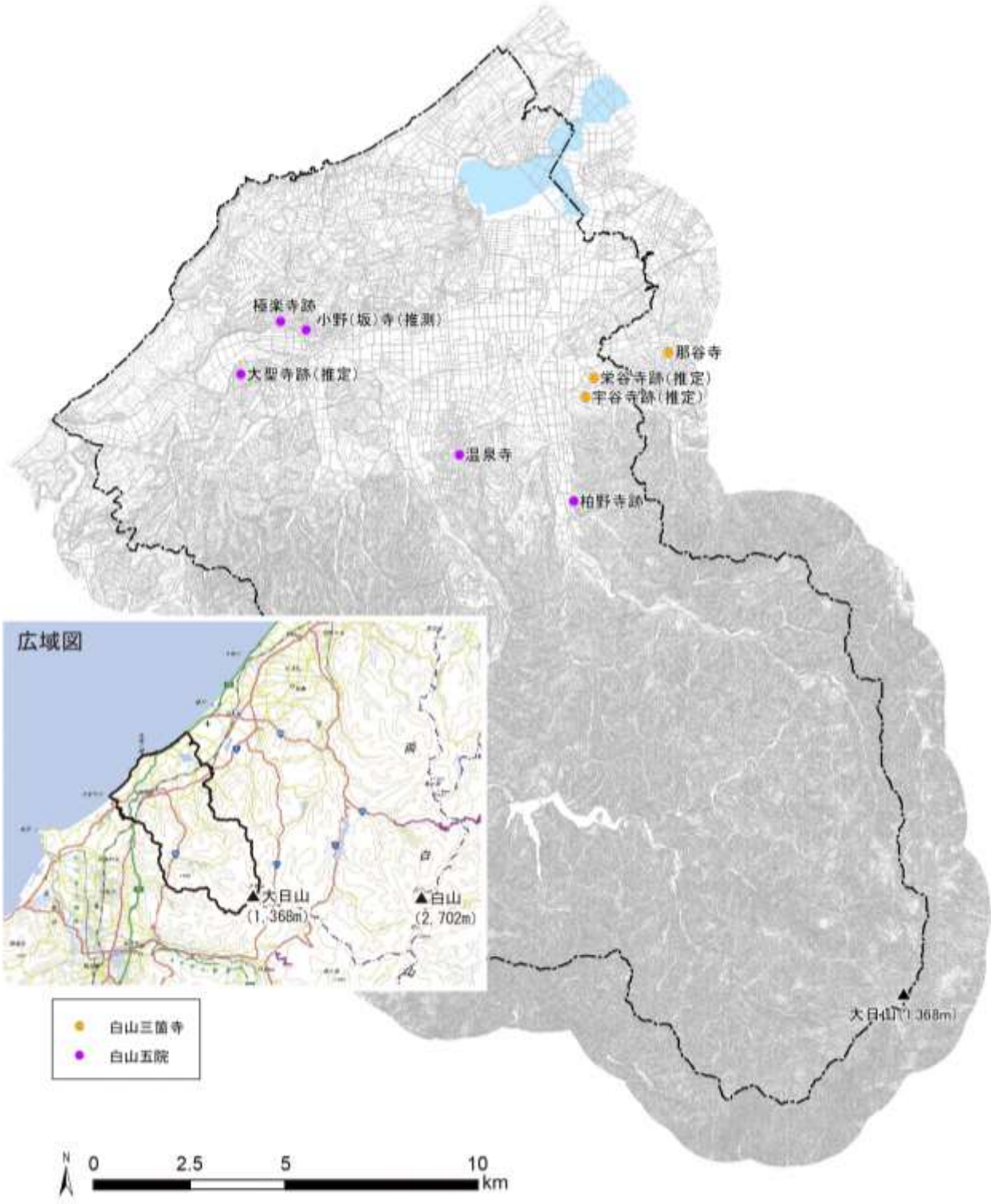


絹本著色十一面
観音図
(市指定の文化財)



絹本著色阿弥陀
如来来迎図
(市指定の文化財)

第 1 章 加賀市歴史的風致形成の背景



加賀国における白山信仰拠点の分布

※加賀市歴史文化基本構想の掲載図を一部加工

4) 中世

a. 鎌倉～室町時代（12世紀～16世紀）

○ 源平から南北朝におけるたび重なる抗争

- ・中世は、寺僧や門徒といった地域の民衆を主とした在地勢力が、朝廷や幕府などの中央政権の支配に対し、領地の支配権をめぐり幾度も激しい抗争を繰広げた時代である。
- ・12世紀末、白山宮加賀馬場の神人・衆徒が結束し貴族政権に対して抵抗運動を起こした（安元事件）。安元事件を契機として、北陸の多くの地域で、住民は反平氏・反貴族政権の姿勢を固め、広い結束を持つようになる。住民勢力である北国軍団は、木曾義仲と合流して平氏との戦いを続け、砺波山・安宅・篠原で平家軍を破る。篠原付近は篠原合戦の古戦場であり、現在も斎藤実盛に因む首洗池や実盛塚が伝わる。
- ・鎌倉時代になると鎌倉幕府の主従関係にある武士の東国御家人が地頭として入国し、在地勢力の多くが承久の乱（承久3年（1221））で反幕勢力となった。反幕勢力の敗戦後は、北条一門が守護職を継承し、更に多くの東国御家人が入部し、加賀国は制圧下におかれた。
- ・鎌倉幕府の終焉後、加南の狩野一党を勢力に加えた新田勢は越前に入り、北陸は南北朝の内乱で最も激しい抗争の場となった。

○ 「百姓ノ持タル国」の成立

- ・本願寺8世蓮如は延暦寺により京を追われ、文明3年（1471）に加越境に吉崎御坊を開く。滞在わずか3年にして、吉崎御坊には加賀・越前・能登・越中から多くの信者が集い、寺内町が形成された。
- ・白山信仰の根強い加賀国で浄土真宗がいち早く浸透した背景には、白山三山のうち大汝峰の本地仏を阿弥陀如来とする一向宗の思想が背景にあったとする説がある。そのなかで蓮如が唱える浄土真宗の教えは、既存の一向宗と結びつきを強めて広がり、しだいに北陸に一向宗の一団を形成していった。
- ・加賀守護職の富樫氏は、一向宗の弾圧を行ったものの、一揆の基盤は、額田庄等の門徒化した惣百姓が土豪と同盟することで固められ、徐々に庄園支配の実権を掌握した。長享元年（1487）、能登・越中を含む20万と伝えられる一揆勢は、守護を打倒し、加賀国の実権を握る（長享の一揆）。
- ・守護滅亡後、加賀国は蓮如の子息を中心に加州三ヶ寺による連合支配の体制を整えた。江沼郡には三ヶ寺のひとつ山田光教寺が置かれた。
- ・享禄4年（1531）、越前一向宗の拠点であった超勝寺とのあいだに享禄の錯乱が起き、加州三ヶ寺は没落し、本願寺直参衆を中心にした大名領国制に近い体制が完成、天文15年（1546）に金沢御堂が建設された。



山田光教寺跡（山田町）

b. 水運と産業の充実

鎌倉幕府の執権北条氏は、加賀をはじめとして日本海側に多くの領地をもち、若狭から津軽十^{つがると}三^{さみなと}湊への日本海船運を行っている。日本海沿岸各地の産物は船運により、中国大陸も含め広く交易されたと推察される。

○ 水運を基軸とする流通・交通の発展

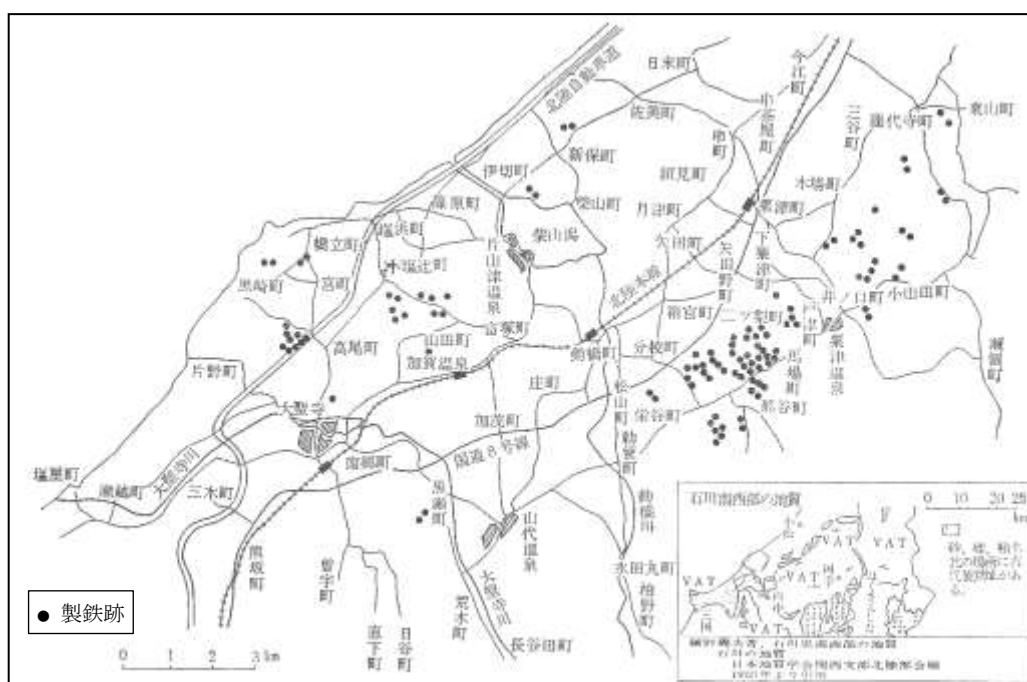
- ・寛治4年(1090)に加賀^{か が の かみ}守であった藤原^{ためふさ}為房が、加賀国府から淡津泊^{あわづのとまり}(大聖寺川河口と想定される)を中継点として敦賀津^{ためふさきょうき}へ向かった記録があり(『為房卿記』)、当時の貴族たちが、京と加賀国の往来に船運を利用していたことが分かる。
- ・中世後期の江沼郡の流通路は、額田十日市や八日市、七日市等の庄園市場を繋ぐ内陸の東西軸と、河川により日本海沿岸の安宅湊や竹ノ浦泊を繋ぐ縦軸をもっていた。

○ 丘陵地帯における窯業・製鉄の発展

- ・中世は、須恵器^{すえき}生産から陶器生産へと転換した時代であり、12世紀～17世紀中葉における30基以上の中世陶器窯跡が確認されている(南加賀窯)。
- ・古代から中世の南加賀では、タタラ(炉に風を送り込む踏んで使う装置)を用いた製鉄が広範囲で行われ、鋳物師や鍛冶の集団が活躍した。
- ・窯跡と製鉄跡は、ともに小松市から加賀市松山町・分校町付近の丘陵地に分布する。さらに、製鉄跡は海側の橋立台地にも分布する。



中世の南加賀の市と湊
(『加賀市史通史上巻』380pに追記)



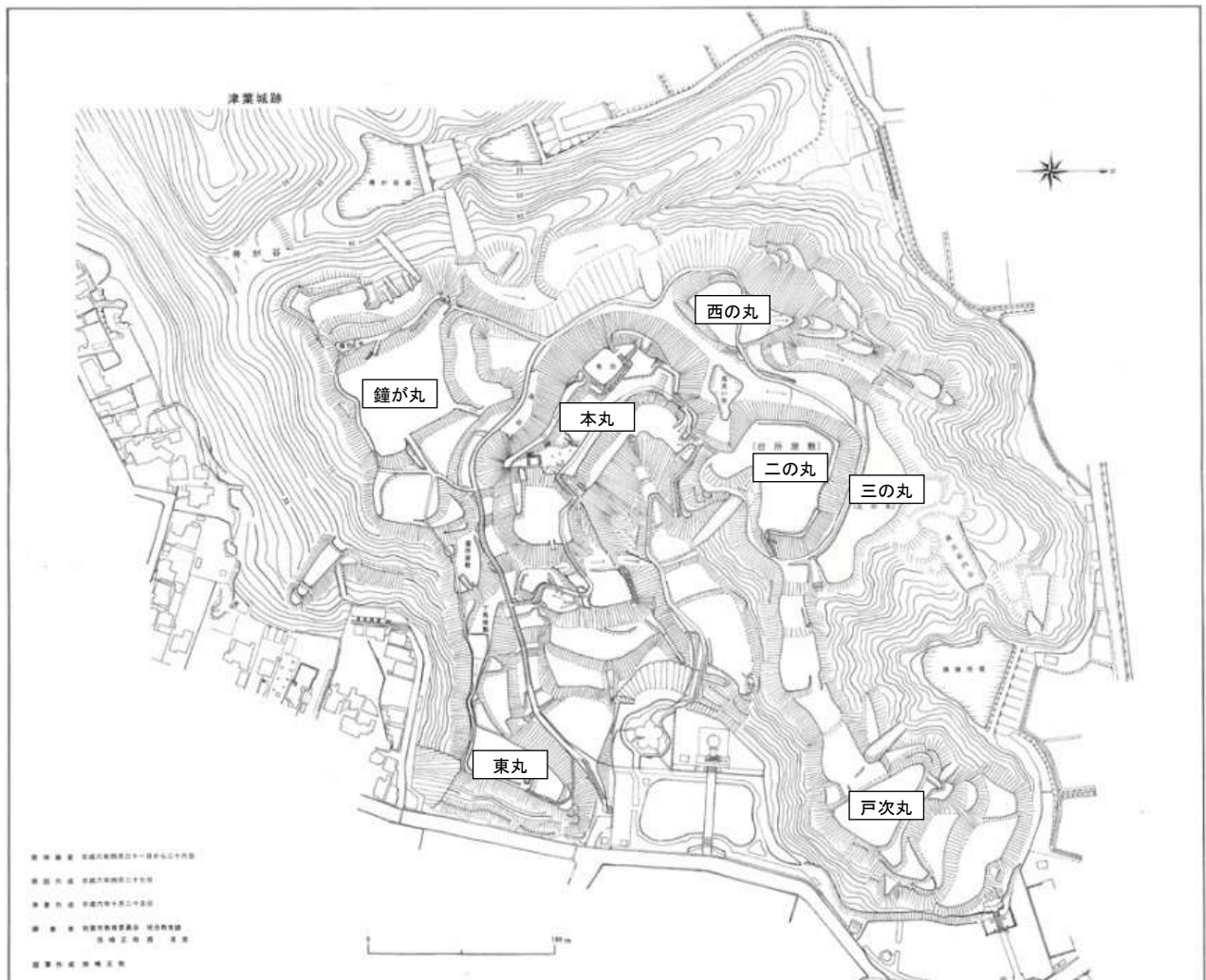
南加賀の古代・中世製鉄跡の分布 (上野與一作成:『加賀市史通史上巻』372pより引用)

5) 近世

天正8年(1580)、織田勢により加賀国の一揆はほとんど平定された。織田から豊臣政権下における溝口秀勝^{みぞぐちひでかつ}や山口宗永^{やまぐちむねなが}(玄蕃^{げんぱ})等の領主は、大聖寺城を居城として江沼郡を支配した。

慶長5年(1600)に大聖寺城主山口玄蕃を滅ぼした前田利長^{まえだとしなが}は、大聖寺城代(のち郡奉行)を置いて江沼郡を支配した。寛永16年(1639)に至り、加賀藩の支藩として大聖寺藩が置かれた。大聖寺町を藩都とする大聖寺藩は、江沼郡全郡と能美郡の一部を領国とし、以後230年間継続し、江沼固有の気風や文化、地域産業の基盤を醸成した。大聖寺から各所には街道が整備され、領内の拠点・産業が網羅されていた。

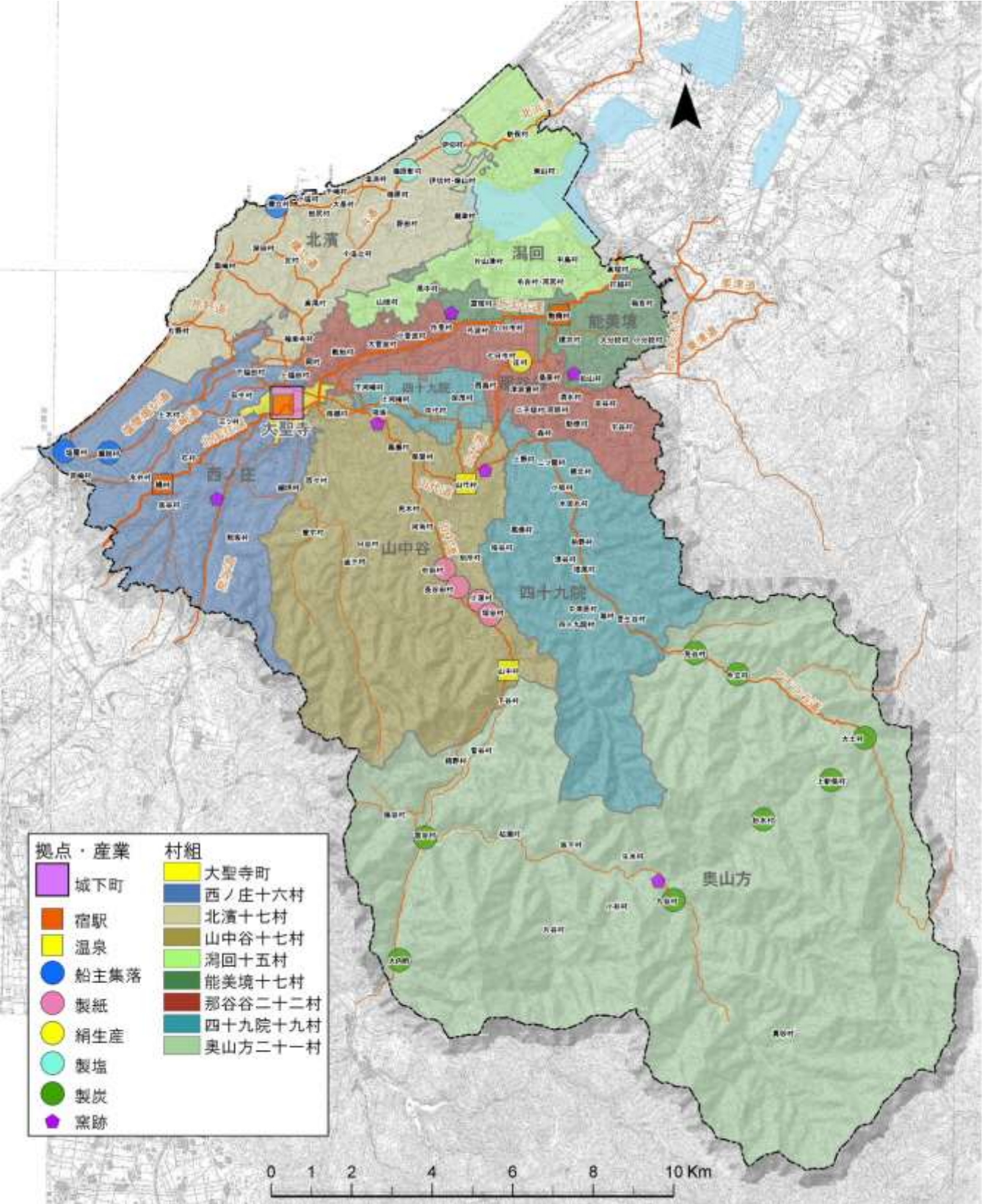
※山口宗永^{やまぐちむねなが}(玄蕃^{げんぱ})：玄蕃とは通称。地域では「山口玄蕃」と親しまれていることから、本計画では「山口玄蕃」で統一する。



大聖寺城跡縄張図

(加賀市教育委員会社会教育課編(1995)『大聖寺城跡—その縄張等現況調査報告書』附図を引用)

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景



近世における市域の構造
街道の位置は迅速測図（明治期）より推定

※加賀市歴史文化基本構想より

a. 大聖寺城下町の形成と発展

○ 藩都「大聖寺町」の形成と発展

- ・大聖寺町が整備される時期は、一向一揆平定後の溝口秀勝のころと判断される。前田家は豊臣政権下における城下町を継承し、廃城となった大聖寺城に代わり、大聖寺川・熊坂川を堀として、錦城山麓の一体を藩邸とするとともに、現在の町割りの基礎を築いた。現在も旧城下町においては、江戸後期の大聖寺町絵図面（市指定の有形文化財）の町割りがほぼ残っている。
- ・大聖寺藩邸は、藩祖前田利治初入部の寛永16年（1639）に造営された。大聖寺城があった錦城山の麓に造られた、堀と河川に周囲を囲まれた広大な陣屋で、正面となる東側に長さ100間（約180m）を超える長大な長屋門が設けられていた。元禄6年（1693）にほぼ全焼するが、宝永元年（1704）に再建された。嘉永3年（1850）から三度にわたって増築され、幕末にはさらに壮大な規模の藩邸となった。藩邸の一部は廃藩置県後も「藩政記念室」として再利用されていたが、昭和9年（1934）の大火で主だった建物は焼失した。
- ・城下町では、^{ほんまち}本町・^{ばばまち}馬場町・^{はちけんみち}八間道付近を上級武士の館、^{なかちょう}仲町・^{たかじょうまち}鷹匠町・^{みみきやま}耳聞山付近を上中級の武士居住区、^{うおまち}魚町・^{てっぽうまち}鉄砲町・^{ゆみちちょう}弓町等に下級武士や職人を住まわせるなど、藩政初期より身分や職業により居住区分が成された。また、寛永・正保期（1624～1648）には城下の整備に伴い、藩に対立した浄土真宗以外の禅宗系の寺院を意図的に城下町南西の「^{やまのした}山ノ下」という地域に集め、現在、大聖寺山ノ下寺院群となっている。
- ・商品流通の発展に伴い、周辺の農村部から多くの人口が流入し、藩政期を通じて町域は徐々に拡大した。
- ・城下町には、塩・茶・絹・紙をはじめとする問屋が置かれ、領内の商品流通を掌握した。吉田屋や福田屋をはじめとする有力町人は町会所を通じて町政の主体となった。城下の有力町人は、浜方の北前船主とともに、豊かな経済力によって藩財政を支えた。



本町周辺の町並み



耳聞山付近の町並み

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景



魚町周辺の町並み



大聖寺山ノ下の町並み（大聖寺神明町）



大聖寺藩邸絵図



大聖寺町絵図面の範囲（航空写真と合成）

江戸時代後期の城下町の様子を縦 2.60m、横 2.65mの大画面に描く。現存する大聖寺町絵図のなかで最も大きく精密な図面で、町人に至るまで居住人の名前を詳細に記し、屋敷の広さも朱書きされるなど、藩主の膝元として整備された町並みを今に伝える貴重な資料。

b. 藩制下における地域整備

○ 陸上交通網の発展

- ・領国の東西を貫き、官道である往還道（北国街道）が整備され、西から橘・大聖寺・^{いぶりはし}動橋・^{つき}月津に宿駅が設けられた。
- ・官道のほか、山代・山中へ至る温泉道、吉崎に至る吉崎道、那谷寺へ至る那谷観音道、東谷に至るアチラ谷道、熊坂越・風谷越・大内越等の峠越も存在した。大聖寺城下や宿駅動橋等を基点とする多くの道が存在し、官道や主要な間道には関所や口留番所が置かれた。



かつての北国街道 動橋宿



細呂木町（福井県）から橋町（石川県）までの
国境付近では、現在でも古道の面影が残る

○ 農林業における生産基盤の発展

- ・江戸前期においては、藩が直接的に勸農の主導権をもち、特に2代・3代藩主の治世には、強力に新田開発・殖産事業を実施する。中期以降は、篤志、篤農の者による殖産事業が目立つ。
- ・藩政初期において潟回り、北浜、山中谷等を中心に新田開発が盛んに行われた。新田開発のため、北浜の片野村の「大池」（現在の片野の鴨池）の掘抜工事等も行われた。
- ・農業用水は、河川が急流な山方と河川のない浜方では堤（溜池）が利用され、それ以外では河川に多くの堰（水をせき止めて取水する施設）が設けられた。近世初期から同中期には、藩命により市之瀬用水や矢田野用水をはじめとする大規模な堰が設けられた。
- ・大聖寺藩では江戸中期に松奉行を設け、山林の伐採を取り締まるとともに、砂丘地帯の飛砂による被害を軽減するため植林を行った。文政8年（1825）に松奉行となった^{こづかとうじゅうろう}小塚藤十郎は、^{うわ}上木・^{せごえ}片野・瀬越・塩屋のほか、山代・黒瀬・橋立に松苗を植え、松林の育成を始めた。



片野の鴨池（県指定の天然記念物・片野町）



矢田野用水取水堰（横北町）

○ 産業の新基軸の確立

- ・近世初期、藩は農政に留意したものの、狭い領国ではその生産に限界があり、新たな産業に力を注ぎ、商品経済の発展を図った。
- ・藩祖利治は、領内の九谷村で磁器生産を企画し、明暦元年（1655）ごろに色絵磁器生産（古九谷）を始めた。その後約 50 年で廃窯するものの、廃窯から約 100 年後に吉田屋伝右衛門^{よしだやでんえもん}の尽力により、九谷焼再興の動きが起こり、藩の保護のもと、吉田屋窯、宮本窯、松山窯、九谷本窯等多くの優れた民営窯が開窯された。
- ・山中漆器は山中温泉の入湯客の土産物として求められ、幕末には藩が漆器会所を設けて保護した。また、蒔絵の技術を取り入れ、より高級な製品として生産されるようになった。
- ・中田・長谷田・上原・塚谷^{はせだ うわぼら つかたに}では、藩の保護のもと領内で用いられる紙の生産が成された。
- ・近世の絹生産は庄村付近に興り、『加賀江沼志稿^{えぬましこう}』には庄村の絹役運上が唯一見受けられる。庄村から大聖寺町に拠点を移した絹生産は繁栄し、絹織物の生産は苦しい武士の家計を奥方（内儀とも）が助けたことから、「御内儀絹^{おかみさまぎぬ}」と呼ばれた。
- ・篠原新町、伊切町は、近世に開かれた出村で、漁業とともに製塩業を営み、浜佐美（現小松市）とともに大聖寺藩の製塩地に位置付けられた。
- ・奥山方では製炭が盛んに行われ、藩庁や藩士へも納めた。



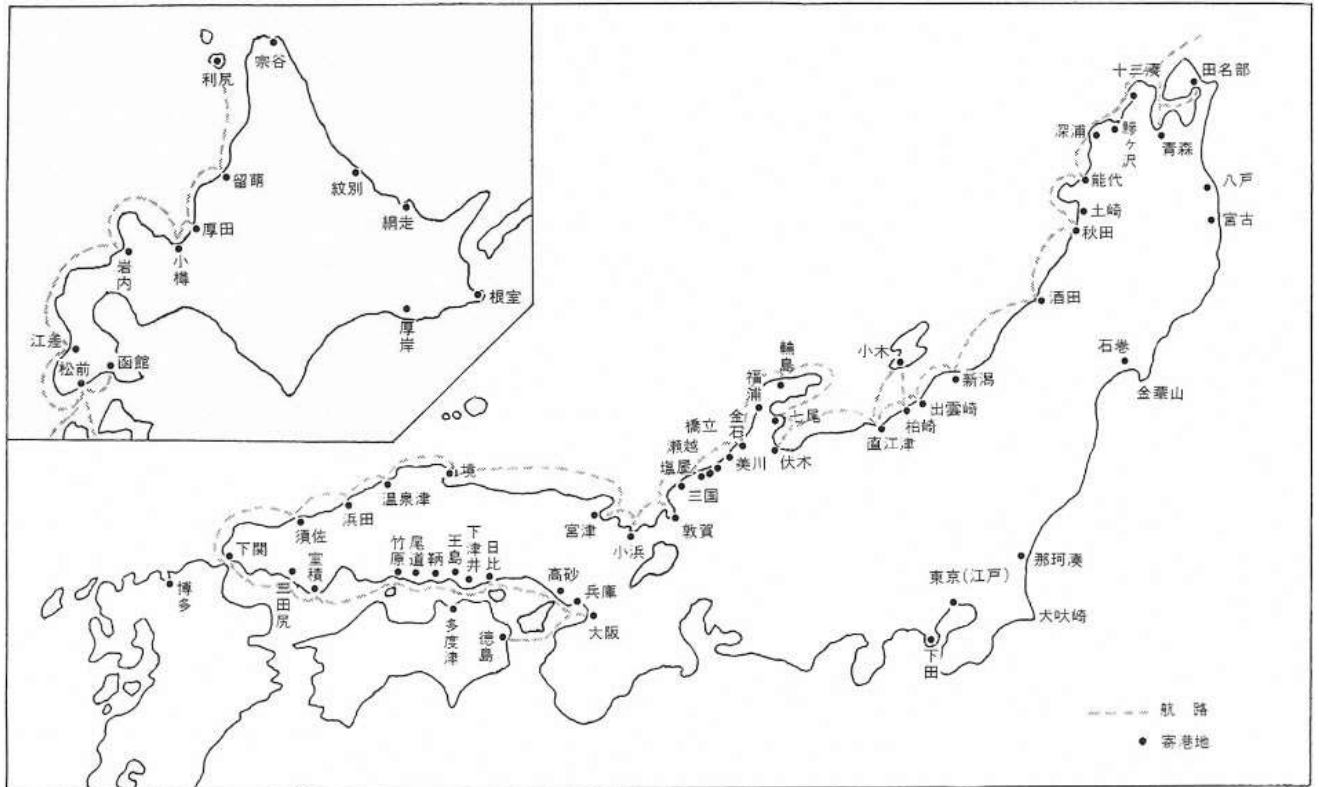
九谷磁器窯跡（九谷焼窯跡展示館：国指定の史跡・山代温泉）

c. 北前船による日本海交易

加賀藩3代藩主前田利常は、寛永16年(1639)、下関まわりによる大坂への藩米輸送に成功する。また、幕府でも寛文12年(1672)に出羽から大坂・江戸への航路を開き、下関を経由する西廻海運が軌道に乗る。その後、近江商人により、北前船は蝦夷地へも進出した。

近世前期、越前、加賀、能登の船乗りの多くは、近江商人の「荷所船」の乗組員を務めており、近世後期ごろからは、北前船主として自立するに至った。

※当時は「大阪(おおさか)」を「大坂(おおさか)」と表記した。



北前船寄港地 (幕末～明治20年ごろ『加賀市史通史上巻』829pより引用)

○ 北前船主の繁栄

- ・大聖寺藩の橋立村・塩屋村・瀬越村では18世紀後半ごろから多くの船主を輩出し、「浜方」として繁栄を誇った。
- ・橋立には西出家・久保家をはじめとし、寛政8（1796）年の『船道定法之記』には小塩村の2人を含む42人の北前船主が記録されている。
- ・塩屋（堀切）は大聖寺藩の外港として、大坂への廻米をはじめ、諸物資の出入りはほとんどこの港に限られ、船番所・潤奉行等もおかれていた。西野家・亀田家をはじめとする北前船主が住み、『加賀江沼志稿』によれば3艘の渡海船を有していた。
- ・瀬越は港をもたないが、その歴史は古い。加賀前田家が江沼郡を領有した時期から船裁許（商船の管理人）を務めた亭家が居住するとともに、廣海家・大家家等多くの北前船主があり、廣海家では大聖寺藩政以前から、敦賀への登米を行っていた資料が残る。
- ・大聖寺藩は、幕末に至り財政上の危機・国防上の必要に際して、船主をはじめとする豪商より援助を得た。藩では船主の有力者に対し、禄高で身分上の優遇を図った。

d. 温泉文化の醸成

山中・山代の両温泉はともに行基の開湯伝説をもち、すでに中世には湯治場として知られ、山中温泉では文明5年（1473）に蓮如が、山代温泉には永禄8年（1565）に明智光秀が入湯した記録が残る。近世に至り、両温泉地に関する史料も増え、温泉の賑わいと風情が伝えられる。

○ 温泉の風情と賑わいの醸成

- ・山中温泉は、慶安元年（1648）の火事により、新しく町割りが行われ、総湯（湯ざや）を中心とし湯本12軒をはじめとする50軒前後の湯宿が営まれた。藩主、上級武士、北前船主や船頭等の貴顕名士が訪れ、元禄2年（1689）には松尾芭蕉が9日間逗留し、『紙本墨書温泉頌山中の句』の中で「扶桑の三名湯」と讃えている。なお、山中温泉では、湯宿は内湯をもたなかったため、湯治客は皆総湯に出かけた。



加州山中温泉並名所古跡処道案内図（出典：『山中町史』（昭和34年（1959） 山中町史刊行会）

- ・山代温泉は、総湯を中心に18軒の温泉宿が囲み、湯の曲輪^{がわ}を形成した。山中温泉とは異なり、湯宿それぞれが湯壺をもっており、湯治客は宿中の「内湯」に入浴することができたため、芸妓や舞妓等も湯宿に出入りするようになり、宿自体が賑やかであった。



薬王院の温泉寺縁起図（部分）（嘉永5年（1852））（市指定の有形文化財・薬王院）

e. 大聖寺藩の気風の醸成

○ 学問尊重の精神の醸成

- ・大聖寺藩では、学問や芸術に秀でた藩主が多く、藩士子弟の文武にわたる教育に力が注がれ、嗜みとしての文化が醸成された。学問や芸術を尊重する精神は、明治期以降も受け継がれ、幾多の人材を世に送り続けた。
- ・幕府や加賀藩の朱子学への傾倒の影響を受け、大聖寺藩においても大田錦城^{おお た きんじょう}をはじめ多くの儒学者を輩出した。漢学のみならず、算学や蘭学等の諸学に優れた人材を輩出した。
- ・天保11年(1840)に文学学校としての学問所(後に「時習館^{じしゅうかん}」と改名)、安政4年(1857)に、武学校としての有備館^{ゆうびかん}が設けられた。
- ・大聖寺藩及びその領内を記録・研究した『苳愬紀聞^{ぼっけいきぶん}』『藩国見聞録^{はんこくけんぶんろく}』『加賀江沼志稿^{えぬましこう}』等多くの資料が残される。

○ 嗜み・芸術の発展

- ・茶の湯は藩主から藩士・町人に嗜まれ、道具を育て、作法を定着させた。城下町には多くの茶室や菓子店、茶問屋や道具商が集中していた。
- ・茶道とともに、漢詩、歌道、俳諧、能楽、花道、書道、絵画の諸道が発展した。
- ・大聖寺藩における俳諧は、松尾芭蕉の逗留した山中温泉が中心となり、多くの俳人たちが逗留した。
- ・茶の湯の文化は、優れた茶器としての九谷焼を発達させるとともに、その道具へのこだわりは、山中漆器の技術を高める背景となった。

○ 北前の文化と精神の醸成

- ・北前船により運ばれた中国地方の御影石は、橋立や瀬越、塩屋をはじめとし、建築用や墓の石材として用いられた。また、多くの焼物が運ばれ、特に伊万里焼は大量にもたらされ、九谷焼にもその画風が取り入れられたと見られる。
- ・多くの船乗りが湯治に訪れた山中温泉では、「出雲節」や「どっさり節」が伝わり、「松前追分^{まつまえおいわけ}」の追分調を継承する「山中節^{やまなかぶし}」(市指定の無形民俗文化財)が生まれた。
- ・北前船主や船頭は、航海の安全を神に祈願し、神社に多くの船絵馬を奉納した。常に危険に晒^{さら}される船乗りたちは神仏への篤い信仰心を持ち、船の安全を祈った船絵馬が多い。
- ・北前船の船乗りは、概ね船主の居住地を中心に、江沼郡内からも多く採用され、厳しい日本海の船上にあり、未知の世界に挑む「北前魂」と言うべき精神を醸成した。



はしたて いずみ
橋立出水神社奉納毘沙門丸
市指定の有形文化財(元治元年(1864))

f. 一揆と打ちこわしの頻発

- ・大聖寺藩は小藩で当初より財政が窮乏状態であり、農民からの収奪強化に陥ることが多かった。
- ・茶・絹・紙・炭等は、藩の殖産政策下に特権を与えられた問屋が支配し、これらを背景とした百姓一揆・騒動が度重なって起こった。
- ・なかでも、正徳一揆は、加賀藩領で起こった52回の一揆や打ちこわしを含めてもその参加人員が多かったこと、活動範囲が広大であったことから、最も規模が大きなものとされている。これは多くの百姓一揆が失敗に終わっているのに対して、農民側の成功となっていたこと、首謀者がついに発覚しなかったほど統制がとれていたこと、一般農民が常に活動の主体であったことなど、真の農民自体の反抗であった。さらに、これにより、茶問屋、絹問屋、紙問屋などが廃止され、その後十数年にわたって、生産者から消費者への直接販売をもたらした。

大聖寺藩に起こった一揆と打ちこわし

件 名	時 期	概 要
吉崎騒動	寛文6年（1666）	詳細不明
正徳の大一揆	正徳2年（1712）	全藩域規模の一揆。凶作に伴う年貢減免の要求。那谷村襲撃、串村茶問屋襲撃、山代・山中両村十村襲撃。
弓波村穂の宮集合一件	宝暦6年（1756）	詳細不明
毛合村一件	安永6年（1777）	凶作に伴う年貢減免の要求。未遂。
上河崎村豆田高一件	文政12年（1829）	越高（他村民の所持地になっている土地）の取り戻し要求。要求取下げ。
奥山方炭一件	年未詳	詳細不明。奥山方一党で強訴を試みるも未遂。
蓑虫一揆（明治一揆）	明治4年（1871）	銀納の増加への抵抗運動。中島村・菅波村・大聖寺で打ち壊し。およそ1,000人。破損家42件、即死1人、手負3人。首謀者は新家理與門。

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

6) 近代

a. 近代

明治維新を迎え、廃藩置県のもと大聖寺藩は石川県江沼郡となった。江戸時代に繁栄していた北前船は、鉄道交通体系への変化とあいまって衰退していく。

○ 「大聖寺町」の継承と発展

- ・大聖寺町は、政治、経済だけでなく商業の中心地として発展し、明治5年（1872）の国立銀行条例の制定を契機に、同11年（1878）に八十四銀行が創設された。
- ・大正から昭和初期になると、絹織物業の発展から大聖寺は工業都市としての性格が強くなる。

○ 近世以来の産業の新たな発展

- ・明治20年代に入り、大聖寺町の絹織物業は飛躍的に発展し、生産高・品質ともに全国的に知られるようになった。
- ・林産物の特産品としては、三谷村（現在の三谷地区）における油桐が挙げられ、桐油やワニスとして多く生産された。
- ・九谷焼は、石川県令の尽力により九谷陶器会社の設立等を行うものの、日露戦争以後は、実力ある陶工たちの独立気運が高まり、個人主体の時代へと移り変わっていった。
- ・山中漆器は、幕末から都市部に販路を広げ、長崎貿易による海外輸出もなされている。漆器業の発展に伴い、明治33年（1900）に、山中漆器組合が形成された。
- ・近代になると、湯治客数は増加し、山代・山中の両温泉とともに、新たに片山津温泉が台頭した。大聖寺を中心に山代・山中・片山津の各温泉地が鉄道網で結ばれ発展に寄与した。
- ・北大路魯山人は、山代温泉に2か月ほど逗留し、九谷焼や加賀の食材等に親しみ、多くの足跡を残した。



旧山長織物会社の事務所

（現深田久弥山の文化館：国の登録有形文化財・大聖寺番場町）

7) 現代

a. 現代

石川県江沼郡となったあと、幾多の変遷を経て、平成17年（2005）10月に、旧加賀市と旧山中町が合併し、現在の加賀市となった。

○ 加賀市の誕生と戦後の復興

- ・昭和29年（1954）の町村合併促進法の制定を受け、昭和33年（1957）に旧山中町を除き、旧加賀市が誕生した。合併後の加賀市は9ヶ町村の寄り合いであり、地域的な利害の対立や基幹産業である繊維産業の経営不振等で市の財政は苦しい状況であった。そこで公共施設の統廃合

第1章 加賀市の歴史的風致形成の背景

等を進め財政を健全化し、昭和40年（1965）から新たに産業開発を主眼とし、農業経営の改善や近代化、工場誘致等を推し進めていった。

- ・昭和27年（1952）から開始された柴山潟干拓事業は300haの新たな水田を造成し、昭和42年（1967）に完工した。計画当初は全面干拓の予定であったが、片山津温泉の観光面への配慮から、西側の200haの水面は遊水地として残すこととなった。この干拓事業の結果として、動力揚水機の利用による水田化、^{かんがい}汚泥灌漑による砂丘の水田化が可能となり、柴山、伊切、篠原の各町に多くの水田が造成された。



国営加賀三湖干拓建設事業計画概要図

（出典：加賀三湖周辺完工記念冊子）

- ・工業においては、戦後の混乱期やその後の復興期においては、様々な中小企業や零細企業が興り、やがて消えていくという不安定な状態が続いた。昭和20～30年代（1945～1964）は伝統的な繊維工業を基軸としながらも、それ以外は業種構成が変わりながら推移していった。昭和40年代（1965～）になると現在もチェーンやリム・ホイール等で知られる大同工業株式会社の台頭により、機械工業が躍進していった。そのほかには、別所町に加賀山中漆器団地が昭和39年（1964）にでき、分校町中心の瓦工業も活性化し、工業発展の一翼を担っていた。



大同工業株式会社

- ・昭和53年（1978）には県内の北陸自動車道が全線開通し、翌年には市域外であるが国道8号の金沢バイパス、加賀産業道路が完成し、自動車による広域的なアクセス性が飛躍的に向上する。鉄道ではJR北陸本線が昭和41年（1966）に県内の複線化が完了し、昭和45年（1970）に加賀温泉駅が作見駅から改称され、加賀市における主な特急停車駅として新たな玄関口になった。

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

○ 歴史文化に配慮したまちづくり

- ・平成初年度より大聖寺山ノ下寺院群の町並みを始めとする歴史や文化を活かした町並み保存活動が活性化した。各地区のまちづくり推進協議会やNPOなどを始めとして、地域の歴史や文化の調査、研究や保存、継承、活用などに積極的に携わる多くの市民団体が活動している。
- ・代表的なものとして、平成13年（2001）に立ち上げた「NPO 法人歴町センター大聖寺」では、平成15年（2003）に市民多数の寄付金をもとに、旧大聖寺藩のシンボルであった「時鐘堂^{じしょうどう}」を70年ぶりに再建した。そのほか、平成18年（2006）に、旧大聖寺川での屋形船運行事業や歴史資産を守るための文化財レスキュー隊を結成するなど多彩な事業を展開している。



時鐘堂（大聖寺本町）



文化財レスキュー隊



屋形船（※休止中）

（2）人物

1）中世

a. 斎藤実盛（さいとう さねもり）天永2年～寿永2年（1111～1183）

平安末期の武将。江沼郡永井（現加賀市）に生まれたという説もあるが、定かではない。武蔵国長井に移り住んで斎藤別当実盛と称したという。保元の乱（保元元年（1156））で功績を挙げ、平治の乱（平治元年（1159））でも活躍した。寿永2年（1183）木曾義仲に平家軍が倶利伽羅で大敗し加賀国篠原（現加賀市篠原町）まで逃れたが、この地で義仲の家来手塚太郎光盛^{てづか たらう みつもり}と戦い討ち死にした。

加賀市には、実盛にまつわる史跡や伝承が多く残る。実盛が白髪を黒髪に染めたおりに使ったとされる鏡が沈められている鏡の池（市指定の史跡・深田町）、義仲が実盛の首を洗ったという首洗池（手塚町）、実盛の亡骸を葬ったという実盛塚（篠原新町）等がある。



実盛塚（篠原新町）

b. 蓮如（れんにょ）応永22年～明応8年（1415～1499）

浄土真宗本願寺第8代法主。本願寺中興の祖。

「御文」や「名号」の付与、「講」組織による団結力の強化などで布教拡大を図った蓮如は、さまざまな既存勢力と対立した。寛正6年（1465）延暦寺僧徒による大谷^{びやうしよ}廟所の破壊を招き、蓮如は近江へ難を逃れた。文明3年（1471）越前吉崎に御坊を建て、この地を拠点に布教活動を行った。その結果、加賀地方には真宗門徒が爆発的に増加した。

市内の浄土真宗寺院には、蓮如真筆の六字名号や御影が多く伝世し、蓮如にまつわる伝承も各地に多く残る。



c. 溝口秀勝（みぞぐち ひでかつ）天文17年～慶長15年（1548～1610）

溝口秀勝は天正11年（1583）賤ヶ岳の戦いで羽柴秀吉に与^{くみ}し大聖寺城主となり、江沼・能美両郡4万4000石を受ける。天正16年（1588）江沼郡の農民から刀狩りを実施し、太閤検地に際し、沼地の多い領地の治水工事に着手し、耕地面積を拡大させたという。新発田移封までの大聖寺在住は15年間であるが、この間に城下町大聖寺の基礎ができたという。



d. 山口宗永（玄蕃）（やまぐち むねなが（げんぱ））天文14年～慶長5年（1545～1600）

大聖寺城主。玄蕃とは通称。慶長3年（1598）溝口秀勝の新発田移封後、江沼郡を支配したのは小早川秀秋の筆頭家老山口玄蕃頭宗永であった。玄蕃は山城国の出身で、千利休に茶道を学んだり、毛利輝元や小早川隆景らと茶会を催したり、また、能楽にも通じたりと、かなりの教養人であったという。信仰心も篤く、極楽寺や全昌寺を復興し、菅生石部神社の屋敷廻りを安堵するなどした。慶長5年（1600）関ヶ原の戦いで石田三成方に与し、大聖寺城で前田利長と戦って敗れ自害したと伝わる。古老によれば、首は城下町内の福田橋のたもとに埋められ、同年には既に首塚があったという。首塚は位置を変えながらも現在に継承され、顕彰されている。



山口氏霊地碑
（大聖寺新町）

2) 近世

a. 前田利治（まえだ としはる）元和4年～万治3年（1618～1660）

大聖寺藩初代藩主。加賀藩3代藩主前田利常の3男。母である天徳院は將軍徳川秀忠の娘。大聖寺藩の藩祖として藩の基礎を築く。

利常は幕府の監視を弱めるために、加賀藩の領地を分散させ、長男^{みつたか}光高に加賀藩主の家督を譲り八十万石、次男利次^{としつぐ}に富山十萬石、3男利治^{としはる}に大聖寺七萬石を与えた。利治は豊かで住みよい町をつくるため、殖産興業に尽力した。鉱山開発に力を注ぎ、領内に金銀山を発見した。この鉱山開発の途上で見つかった良質の陶石や利治が小堀政一^{こぼりまさかず}（遠州）から手ほどきを受けた茶人であったことが、後の九谷焼の生産に結びついたとも考えられる。また、真砂^{まなごき}木地師^{じし}（旧山中地区の真砂地区の挽物職人）の保護は大きな功績といえる。2代利明とともに大聖寺藩の発展に大きく寄与した。

菩提寺である実性院^{じっしょういん}（大聖寺下屋敷町）には藩祖利治をはじめ歴代藩主の廟所^{びやうしょ}があり、また、菅生石部神社^{すがういそべ}（大聖寺敷地）には、利治の文書や寄進の工芸品等が伝世、いずれも加賀市指定文化財となっている。



前田利治墓
(大聖寺下屋敷町)

b. 吉田屋伝右衛門（よしだや でんえもん）宝暦2年～文政10年（1752～1827）

吉田屋4代目。大聖寺城下屈指の豪商で代々酒造・金融・薬商等を営む。吉田屋は豊田家の屋号。漢学、詩歌、書画や篆刻^{てんこく}等に秀でた博学多才の文化人。明和7年（1770）家督を継ぐ。晩年、九谷焼の再興に力を尽くした。

九谷焼は、大聖寺藩祖利治が領内の九谷村（現山中温泉九谷町）で鉱山開発中に陶石が発見されたのを契機に、明暦元年（1655）ごろに色絵磁器生産を始めたことが創始とされ、2代藩主利明が引き継ぐが、約50年で廃窯する。この時期に焼成されたものを古九谷と称する。

廃窯して約100年後、伝右衛門は九谷窯を発祥の地九谷村に築き、九谷焼再興を実現した。まもなく諸事情から山代に窯を移すが、これが現代に続く九谷焼の始まりとなった。伝右衛門なくして今日の九谷焼の発展はなかったといえよう。

九谷磁器窯跡は再興窯もあわせ国の史跡となっている。発祥の地山中温泉九谷町では現在、史跡公園の整備が進められており、再興九谷窯跡は九谷焼窯跡展示館として公開されている。



c. 大田錦城（おおた きんじょう）明和2年～文政8年（1765～1825）

江戸後期の儒学者でわが国考証学派の祖。大聖寺藩医^{かしだ げんかく}榎田玄覚の7男として生まれる。20歳のとき儒学を志し上京。

錦城の最大の功績は、中国の考証学を取り入れて日本の考証学を発展させたところにある。著述は、書名のみ知られるものも含めると140種余りに及び、大田錦城遺稿は加賀市指定文化財となっている。著述の中で最も評判の高かったのが『九経談』^{きゅうけいだん}で、『孝経』『大学』『中庸』『論語』『孟子』等についてそれぞれ考証を加え、総論を冠した10巻からなるもので、錦城の名を一躍世間に広めた。



d. 小塚藤十郎（こづか とうじゅうろう）天明5年～安政6年（1785～1859）

大聖寺藩士^{やまとしん ござ えもん}山本新五左衛門の3男、後に小塚家の養子となる。文政7年（1824）藩に植^{しょくぶつかた}物方の設置を建言し自ら植物奉行となり、松奉行、用水奉行、産物方を歴任する。在任中は天保大飢饉による領民の困窮や藩財政の窮乏のなかで殖産興業に尽力した。特に松の植林に生涯の情熱を傾け、数十年にわたり松苗を植え、海岸部では飛砂による農作物の被害軽減を図った。さらに、中断していた大聖寺藩領の地誌『加賀江沼志稿』の編纂事業を再開し、協力者を得、弘化元年（1844）に32巻からなる大著を完成させたのは大きな功績といえる。



小塚藤十郎が植林した加賀海岸のクロマツ林（片野町）

e. 新家理與門（あらいえ りよもん）享和元年～明治5年（1801～1872）

農民^{みのむし}。蓑虫一揆の首謀者。分校村（現分校町）に生まれる。

大聖寺藩は明治4年（1871）の廃藩に際し、藩政時代の膨大な赤字財政を新政府に引き渡すことができず、物納分の年貢を金納とし、しかも米価を例年の10倍にするといった無謀な命令を出した。これに怒った分校村の新家理與門等を中心とする江沼郡の農民たちは、同年かねてより藩の意のままに動いていた農村を束ねる役割である2軒^{とむら}の十村宅（十村：藩主に従い農村を管理し、徴税を円滑にしていた）を打ち壊した。その翌日にはおよそ千人の農民が大聖寺へ集結し打ち壊しをおこなった。やむなく、大聖寺県では軍隊を出動させ一揆勢を鎮圧した。この一揆では、参加した農民たち全員が胴蓑を着けており、その姿がまるで蓑虫のようであったため後に蓑虫騒動とよばれた。逮捕された理與門は獄中で死亡した。



あらいえ りよもん
新家理與門の碑
（市指定史跡・分校町）

葬儀は山代温泉専光寺で盛大に執り行われた。同寺過去帳には「人は一代、名は末代、かくも人に惜しまれ、慕われて牢中に死するも本望か」と記録されている。明治28年（1895）には江沼郡の全町村長らが発起人となり顕彰碑を建立、現在市指定文化財となっている。

f. 前田利𨮒（まえだ としか）天保12年～大正9年（1841～1920）

大聖寺藩 14代藩主。初代利治から連綿と続いた大聖寺藩最後の藩主。加賀藩^{なりやす}13代藩主前田斉泰の7男。利𨮒が藩主となったころは幕末の動乱期、藩政改革に着手した。版籍奉還後、藩債支払いを補うため、自らの家禄の半高を返還したことは有名である。廃藩後は東京に移り宮内省に出仕した。



詩歌・書画にすぐれ、市内社寺や学校等に利𨮒の書跡を見ることができる。能楽は宝生流の巨匠ともいわれ、加賀市錦城能楽会が利𨮒の意志を継ぎ、当地の能楽振興に尽力するとともに、お松囃子^{まつばやし}（市指定無形文化財）を継承している。また、利𨮒の国許別邸の一部は移築され、竹涇館^{ちっけいかん}（国の登録有形文化財）として江沼神社境内で保存活用されている。

3) 近代

a. 大家七平（おおいえ しちべい）慶応元年～昭和4年（1865～1929）

廣海家と並ぶ瀬越の大船主家。大家家は天保末年（1844）ごろに北前船の独立船主となった家系。

4代七平は、4代廣海二三郎の次男で、5代廣海二三郎と同様和船を汽船に切り替え、互いに競って発展を遂げた。明治29年（1896）に日本とウラジオストックを結ぶ航路を開き、ほかにもカムチャッカ等を結ぶ外国汽船の開拓等に活躍した。明治36年（1903）大家商船合資会社を、大正10年（1921）には大家商事株式会社を設立した。4代七平が小樽に建てた倉庫は現存し、小樽市指定歴史的建造物として保存活用されている。



b. 廣海二三郎（ひろうみ にさぶろう）安政元年～昭和4年（1854～1929）

廣海家は瀬越の大船主家。戦国時代から海運業を続けてきた名門で、家伝によれば、同家は文禄2年（1593）大聖寺藩主溝口秀勝から敦賀への年貢米輸送を任されていたという。

5代二三郎は先見の明があり、和船から汽船へいち早く転換したことで知られる。また、欧米を視察して視野を広め、明治29年（1896）には北前船の海難救助のため日本海上保険株式会社を設立し、船主等の救助に尽力した。その後、硫黄や石炭の輸出事業経営にも手をひろげ、明治41年（1908）に広海商事株式会社（後に広海汽船株式会社と改称）を設立した。全国の北前船主のなかでも群を抜いて活躍した5代二三郎は、経済界のみならず教育や社会事業にも貢献した。



c. 久保彦兵衛（くぼ ひこべえ）天保11年～大正4年（1840～1915）

久保家は橋立の大船主家。6代彦兵衛は橋立船道会のリーダーとして、明治期江沼郡の経済や教育に大きな影響を与えた。

久保家はもと小餅屋といい、5代目のとき、大聖寺藩の仕事に大いに協力したことから久保の姓を許された。弘化2年（1845）の大聖寺藩財政整理に元締役を命ぜられ、進んで献金し他の船主にも呼び掛け整理を完成させた。その後、大聖寺町が明治16年（1883）の大火の影響で緊急逼迫、産業打開の道を断たれ苦しんだ際には、他の船主たちを牽引し、多額の融資等で危機を救った。経済的な貢献もさることながら、地域の学校教育や教育施設の充実にも力を尽くした。



d. 西出孫左衛門（にしで まござえもん）元治元年～昭和13年（1864～1938）

久保家と並ぶ橋立の大船主家。11代孫左衛門は明治以降函館に拠点を置き、北洋漁業に転身、北海道経済界の重鎮となった。

西出家は越前（現在の福井県）の領主として名を成す朝倉氏の家老の子孫と伝えられ、2代目から船乗りに転身したという。久保家と同様に大聖寺藩や明治期以後の地域に対し、経済的貢献を惜しまなかった。北海道での活躍で得た財によ



り、明治中ごろまで函館山の大半を西出家が所有していたため、西出山とも呼ばれたと伝わっている。

e. 北大路魯山人（きたおおじ ろさんじん）明治16年～昭和34年（1883～1959）

書、陶芸、^{てんこく}篆刻、料理等さまざまな分野で活躍した総合芸術家。京都生まれ。養子に出され不遇の幼少期を過ごす。家業の木版屋を手伝う傍ら書道に励み、朝鮮や中国を巡り篆刻を学ぶ。

大正4年（1915）に山代温泉に来遊し吉野屋に滞在しながら、旅館等の入り口に掲げるぬれ額を制作した。魯山人の足跡とも言えるそのぬれ額は、今も山代温泉の各所で存在感を示している。また、九谷焼に魅了され陶芸家の須田^{すだ}青華^{せいけ}に指導を仰ぎ、初めて陶芸を体験する。山代温泉での陶芸体験や加賀の豊かな食文化は、後の芸術活動に大きな影響を与えた。

魯山人が仕事場として使っていた吉野屋の離れ座敷は国の登録有形文化財となり、魯山人寓居跡いろは草庵として公開されている。



f. 中谷宇吉郎（なかや うきちろう）明治33年～昭和37年（1900～1962）

物理学者。雪博士。随筆家。片山津温泉に生まれる。

小松中学校、第四高等学校を経て東京帝国大学理学部物理学科に入学。寺田寅彦の指導を受ける。宇吉郎は雪の結晶の美しさに魅せられ、北海道大学で雪の研究を行い、昭和11年（1936）世界で初めて人工的に雪の結晶を作ること成功した。この結晶の生成領域を図式化したのが「中谷ダイアグラム」である。さらに、宇吉郎の研究は、気象観測や低温地域の開発に多大の貢献をし、世界各地で活躍した。また、随筆家としても知られ、科学随筆に独特の境地を拓き、「雪は天から送られた手紙である」という詩情豊かな言葉を残す。

宇吉郎の業績は、生家のあった片山津温泉に近い柴山潟湖畔の白山を望む地に建設された中谷宇吉郎雪の科学館で紹介されている。



g. 深田久弥（ふかた きゅうや）明治36年～昭和46年（1903～1971）

作家。俳人。山岳登山家。大聖寺中町に生まれる。

福井県立福井中学校、第一高等学校文科乙類を経て東京帝国大学文学部哲学科に入学。在学中の昭和5年（1930）文芸春秋に『オロッコの娘』を発表、同年大学を中退する。その後も素朴で叙情豊かな小説を次々発表した。晩年は山をテーマとした紀行文や随筆が多く、山の作家として広く知られた。特に、昭和39年（1964）に発表した『日本百名山』は登山愛好家たちにも多く読まれる名著である。

大聖寺番場町の深田久弥山の文化館では、山の文学者深田久弥の業績や山の魅力を紹介している。建物は国の登録文化財旧山長織物会社を利用しており、明治43年（1910）に建設された近代の産業建造物遺産でもある。



4. 文化財等の分布状況

平成30年（2018）8月現在、国指定の文化財が21件、県指定の文化財が10件、市指定の文化財が133件、国選定の重要伝統的建造物群保存地区の2件を合わせた計166件の指定・選定の文化財が存在するほか、国の登録有形文化財が11件（43棟）あり、市内各所に分布している。

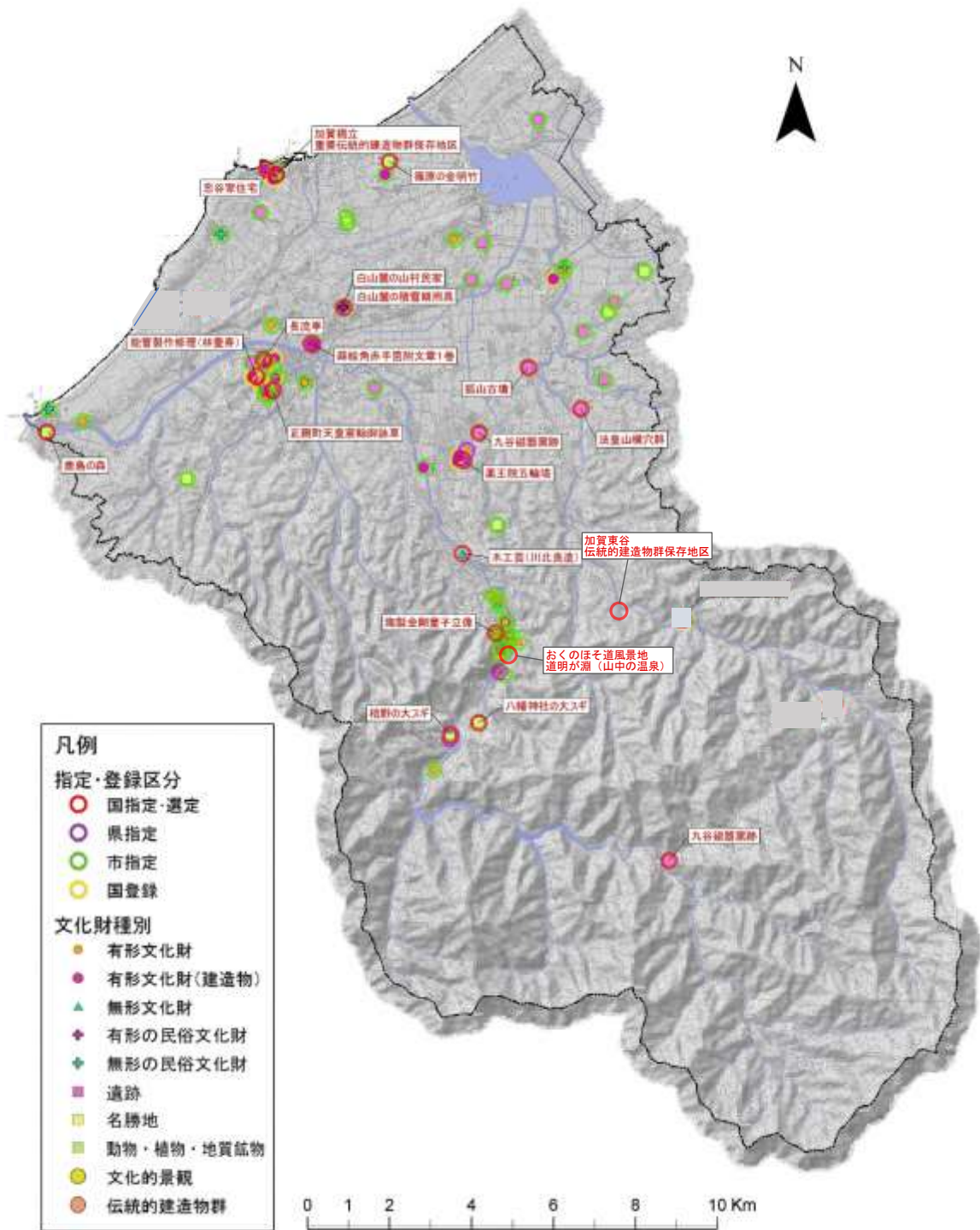
加賀市における文化財の件数（令和3年1月現在）

		国		県		市	
種 別		指定・選定	登録	指定	登録	指定	登録
有形文化財	建造物	3	11※ ¹	1		8	
	絵画			1		19	
	彫刻			1		9	
	工芸品	2		2		28	
	書跡・典籍	1				13	
	古文書					3	
	考古資料					6	
	歴史資料					13	
無形文化財		1		1		1	
民俗文化財	有形の民俗文化財	2		1		2	
	無形の民俗文化財			1※ ²		5	
記念物	遺跡	3				15	
	名勝地	1				1	
	動物・植物・地質鉱物※ ³	8		2		10	
文化的景観							
伝統的建造物群		2					
文化財の保存技術							
合 計		23	11	10		133	

※1 国登録は棟数であるが、本計画では件数で記載

※2 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（大聖寺のゴンガン）にも選択されている

※3 特別天然記念物（オオサンショウウオ・カモシカ）を含む



加賀市における指定・登録文化財の分布状況

※加賀市歴史文化基本構想より

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

(1) 国指定等の文化財

加賀市の国指定等の文化財 23 件の内訳は、有形文化財 6 件と無形文化財 1 件、民俗文化財 2 件、記念物が 12 件、伝統的建造物群が 2 件となっている。登録有形文化財は 11 件である。

1) 有形文化財

有形の指定文化財は、建造物が 3 件、美術工芸品が 3 件ある。建造物は大聖寺地区にある江沼神社長流亭と山代地区にある薬王院五輪塔、橋立地区にある忠谷家住宅と市内各所に分散している。

a. 江沼神社長流亭（重要文化財）

大聖寺藩邸の外郭、旧大聖寺川に臨んで宝永 6 年（1709）に建てられた数寄屋造建築である。設計は小堀遠州とも伝えられているが定かなことはわからない。古くは川端御亭と呼ばれていたといい、藩主の休息所として使われたという。玄関扉のデザインや書院欄間の大胆な意匠など、江戸時代初期の名残を留めており、細部にまでこだわった装飾等加賀・大聖寺両藩の文化水準と工芸技術の高さを今に伝えている。



江沼神社長流亭
(大聖寺八間道)

b. 薬王院五輪塔（重要文化財）

薬王院五輪塔は、平安時代の悉曇学（梵語）の我が国の第一人者である明覚上人の供養塔といわれている。凝灰岩製の五輪塔で、各面に大日真言が梵字で配され、優美な蓮弁円相が表わされている。その優美さと全体の安定感のある形態から、鎌倉時代の建立と推定されている。



薬王院五輪塔
(山代温泉)

c. 忠谷家住宅（重要文化財）

江戸時代後期の天保年間（1830～1843）に独立船主となった忠谷家が、ほどなく建設したと推定される建物で、当初から瓦葺でありながら、一部に茅葺の手法の名残を留めた過渡的様相を示す貴重な建物である。現在、市内に残る北前船主住宅としては最古に分類され、20 畳のオエ背後に 2 列 6 室を配した当地方特有の間取りで建てられている。主屋東に大正時代に増築された離れ座敷及び土蔵 2 棟、屋敷構も共に指定されている。なお、オエは家の中で最も大きな部屋で、天井も高く、板敷きで囲炉裏が切られている。家の中心に位置し、食事室兼居間であり、普段の接客に使われ、村の寄り合いなども行われたといわれる。



忠谷家住宅
(橋立町)

なお、国の登録有形文化財の建造物は11件で、棟数の合計は43棟である。大聖寺地区には、旧月田家住宅（1棟）、時習庵（2棟）、旧中木家住宅（3棟）、旧山長織物会社（3棟）、五徳庵（4棟）、江沼神社竹涇館・梅花庵（2棟）の計6件で棟数は15棟と集中している。その他の地区は各地区に1～2件で、橋立地区には、北前船主屋敷蔵六園（旧酒谷長一郎家住宅）の1件、11棟がある。山代地区には、白銀屋旅館（2棟）、北大路魯山人寓居（2棟）の計2件、4棟がある。山中地区には、山岡商山堂（山岡ビル）の1件、1棟がある。動橋地区には、橋本酒造の1件、12棟がある。

d. 旧月田家住宅

旧大聖寺藩士月田家の住宅として建てられたもので、市内に残る数少ない武家住宅として貴重である。建造年についての直接的な資料はないが、間取りや木材等から江戸時代末期ごろの建築と考えられている。



旧月田家住宅
(大聖寺神明町)

e. 旧山長織物会社

絹織物は永く大聖寺の主要産業であり、明治26年（1893）創業の山長織物会社の製品は大正天皇即位のおりに献上品となるほどであった。登録された建物は明治43年（1910）に建てられ、事務所、石蔵、門の3棟からなる。事務所は木造2階建、桁行8間梁間3間規模、越前瓦葺、建築面積129㎡である。外壁をイギリス下見板張とした洋館風の建築で、開口部を大きくとっている点が特徴である。石蔵は生糸の保管蔵として建てられたもので、木骨石造2階建、桁行4間梁間3間規模、越前瓦葺、建築面積64㎡である。現在は「深田久弥山の文化館」として活用されている。



旧山長織物会社の事務所棟
(大聖寺番場町)

f. 五徳庵

屋敷地は藩政期には中級武士の居住地であった地区であり、江戸期は大聖寺藩士武内家、明治以降は新家家の所有となった。主屋は明治33年（1900）、数奇屋風の離れは大正8年（1919）に建てられた。主屋は木造平屋建、棧瓦葺で外見は下見板張を基本とする。別棟の離れは木造平屋建六畳一間の茶室で、京壁に自然木を用いた床や棚を配するなど凝ったつくりとなっている。



五徳庵
(大聖寺錦町)

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

g. 北前船主屋敷蔵六園（旧酒谷長一郎家住宅）

北前船主酒谷長一郎家の屋敷で、蔵六園とは屋敷内にある遠州流庭園のことで、園名の由来は亀にそっくりな滝石があることから蔵六（四足と頭、尾の六つを隠すことが転じて亀の異名）と命名されたという。明治3年（1870）に建てられた大規模な建物である。主屋は赤瓦葺2階建て、室内の木材は弁柄入り拭漆塗が施され重厚なつくりとなっている。庭園には全国各地の銘石が配されており、数々の古木が、岩盤を鉢状にくり抜いたうえで植栽した特異な形態を持っているため、ほとんどが盆栽樹のように当時の姿で残っている。



北前船主屋敷蔵六園
(橋立町)

h. 白銀屋旅館本館

創業年代は不明であるが、享和3年（1803）の古地図などでその存在を知ることができる。この旅館は大聖寺藩主が山代に入浴した際に用いられ、また内湯を2箇所持っている格式の高い大きな湯宿である。後世に改造されているが建物の構造や表通りからの外観は当時の姿を残しており、柱間にはめ込まれた紅柄格子や両袖の卯建、軒下につけられた船柁（軒を支える腕木の下に化粧天井を張った構造意匠）などが見られる。内部は広さ3間×4間の大きな吹抜けがあり、太い4本の柱と2尺ある指鴨居、大引、貫、梁などで構成されている。



白銀屋
(山代温泉)

i. 山岡商山堂

漆器業を代々営む山岡家の6代目山岡理八が建築したもので、「山岡商山堂」の店舗として利用されていた。昭和6年（1931）の大火のあとの建築で、建物は鉄筋コンクリート造2階建て、外壁は漆喰塗である。現在は、ギャラリーとして利用されている。



山岡商山堂
(山中温泉湯の出町)

2) 無形文化財

a. 重要無形文化財「木工芸」

木工芸には大別して指物・刳物・堀物・挽物・曲物があり、それぞれが技法上の特色を有し、長期にわたる入念な工程を経て、素材の特色を生かした製作が行われている。当市では、木材を轆轤で回転させながら椀・鉢・盆等の丸い器物を削り出す挽物技術が木工芸として重要無形文化財に指定されている。

b. 重要無形文化財「木工芸」（各個認定）保持者

重要無形文化財「木工芸」（各個認定）保持者（いわゆる人間国宝）である当市在住の川北良造^{かわきたりょうぞう}は、山中木地挽物（県指定の無形文化財）の技術を高度な芸術の域まで高め、また、素材の特色を生かすことにかけては卓越した手腕を持つ。父の川北浩一^{こういち}に技術を見習い、後に氷見與三治^{ひみよそじ}（雅号氷見晃堂^{こうどう}）に師事して、さらに技術を高め、後進の指導にも尽力している。



川北良造氏

3) 民俗文化財

民俗文化財としては、有形の民俗文化財である白山麓^{はくさんろく}の山村生産用具^{さんそんせいさんようぐ}及び民家^{みんか}、白山麓^{はくさんろく}の積雪期用具^{せきせつき}がある。

a. 白山麓の山村生産用具及び民家（重要有形民俗文化財）

伊藤常次郎氏^{いとうつねじろう}が長きにわたり、白山麓で採集した山村の生産用具2,638点と民家1棟である。主に山師^{こびき}（木挽）と焼畑・炭焼き関係の資料を中心に、狩猟や漁撈・養蚕^{ぎとろう}などのほか、日々の生活に伴う資料など多岐にわたっている。民家は小松市（旧新丸村）新保にあったもので、典型的な白山麓の民家の間取りであり、最大の特徴は、焼畑に伴う乾燥施設のアマボシダイを備えている点である。ともにかつての白山麓の暮らしを知るうえで、欠くことのできない貴重な資料である。なお、アマボシダイとは、焼畑農耕で収穫したヒエ・アワを乾燥させるため、囲炉裏の上に組み立てられる台のことである。



白山麓の暮らしを反映した民家
（大聖寺敷地）

b. 白山麓の積雪期用具（重要有形民俗文化財）

全国的にも有数の多雪地として知られる白山麓で使用されていた積雪期の民具2,236点である。この資料も伊藤常次郎氏が収集したもので、冬ごもりから翌春に消雪するまでの期間に用いられてきた単純・素朴なものが多く含まれている。白山麓の地域のみで使用された生活用具が数多く、地域的特色の顕著なもので往時の生活の諸相を知るうえで重要な資料である。



積雪期用具

4) 記念物

記念物12件のうち遺跡3件を取り上げる。3件のうち2件は古墳^{ほうおうざん}の法皇山横穴古墳^{よこあなこふん}と狐山古墳^{きつねやまこふん}で、ともに勅使地区にある。また、九谷磁器窯跡^{くたにじき}が山中地区と山代地区にある。

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

a. 法皇山横穴古墳（史跡）

古墳時代後期に作られた横穴墓で、遺体を安置した玄室の天井には様々な形態がある。特に断面が家形をした玄室は死後の家という概念があったことを示すものとして注目される。現在 80 基ほどの横穴が開口しているが、未調査も含めて全体では 200 基程度と推定され、日本海側では最大規模を誇る横穴群である。



法皇山横穴古墳
(勅使町)

b. 狐山古墳（史跡）

水田中にある前方後円墳で、昭和7年（1932）土砂取りの最中に石棺があらわれ、調査の結果、5世紀後半に築かれた全長 54m の古墳であることが判明した。副葬品には銅鏡・銀製帯金具・甲冑・直刀・玉類など、畿内と結びつきの強い遺物が多量に出土している。こうした古墳の規模や副葬品の内容から、畿内勢力と結びつきの深い江沼の首長の墳墓であると推定されている。



狐山古墳
(二子塚町)

c. 九谷磁器窯跡（史跡）

我が国の陶芸史上重要な位置を占める九谷焼の発祥地である山中温泉九谷町と、江戸後期に吉田屋によって再興された九谷窯が山代温泉に移されて以後の窯跡の2か所が、全国的にも珍しい飛び地指定となっている。

山中温泉九谷町の窯跡は、九谷集落跡の大聖寺川を挟んだ対岸丘陵にあり、江戸前期の窯跡2基と江戸後期の吉田屋によって再興された窯跡1基が指定されている。3基の窯跡はいずれも山麓の傾斜を利用して構築された連房式登窯で、江戸前期の1・2号窯は煉瓦を使用していないが、江戸後期の吉田屋窯は大型煉瓦を使用した造りとなっている。九谷古窯の開窯は明暦元年（1655）とされているが、窯は約50年で廃窯する。



九谷磁器窯跡
(山中温泉九谷町)

最も古い1号窯は焚口部分が残っていないものの、全長 33.4m を超える大型窯で、焼成室は 16 房を備えた本格的な窯構造であった。

1号窯廃窯後に築かれたと推定される2号窯は、全長 13.7m で焼成室も6房と小型化しており、茶器製作中心の窯へと生産体制の縮小があったことを示している。また、工房集落地区には色絵窯と推定される焼土遺構が確認され、これによって九谷集落において上絵付まで一貫製作をしていたと判断された。



九谷磁器窯跡
(山代温泉)

九谷古窯が廃絶して100年余りの時を経て、大聖寺藩の豪商吉田屋伝右衛門によって発祥の地で再興された九谷窯が、現在吉田屋窯と称され、これが現代に続く九谷焼の始まりとなっている。再

興後諸事情により窯は山代温泉に移転された。以後、この窯を中心として九谷焼は連綿と受け継がれてきた。

これら一連の遺構は、九谷焼の発祥から再興、現代に至る九谷焼の変遷を理解するうえで、欠くことのできない重要な遺産である。

5) 伝統的建造物群

伝統的建造物群としては、橋立地区にある加賀市加賀橋立^{はしたて}伝統的建造物群保存地区、東谷地区にある加賀市加賀^{ひがしたに}東谷^{しやくだにいし}伝統的建造物群保存地区がある。

a. 加賀市加賀橋立伝統的建造物群保存地区（重要伝統的建造物群保存地区）

加賀市北部の海岸線近くに位置する集落で、江戸後期から明治中期にかけて活躍した北前船の船主や船頭等が居住した集落である。保存地区には往時の様子を伝える船主屋敷が起伏に富む地形に展開している。船主屋敷の主屋は切妻妻入で、屋根は赤褐色の瓦葺、周囲には板塀や土蔵が配される。敷石や石垣には淡緑青色の^{しやくだにいし}笏谷石が使われ、集落に柔らかな質感を与えている。



加賀市加賀橋立
伝統的建造物群保存地区
(橋立町)

b. 加賀市加賀東谷伝統的建造物群保存地区（重要伝統的建造物群保存地区）

加賀市東南部に位置し、大日山を源とする動橋川と杉ノ水川の上流域に点在する4つの集落で構成される。これらの集落は藩政期から製炭業で栄え、明治前期から昭和30年代までに建てられた主屋や土蔵等が群として残る。主屋は2階建、瓦葺、煙出し付の形式で統一され、これらの伝統的建造物群と周囲の自然環境が一体となり、歴史的な山村景観を形成している。



加賀市加賀東谷
伝統的建造物群保存地区
(山中温泉荒谷町、今立町、大土町、杉水町)

（2）県指定の文化財

加賀市の県指定の文化財等 10 件の内訳は、有形文化財 5 件と無形文化財 1 件、民俗文化財 2 件、記念物が 2 件となっている。

1）有形文化財

有形文化財は、建造物が 1 件、美術品が 4 件ある。建造物は山中地区の無限庵御殿がある。

a. 無限庵御殿

尾小屋鉾山の経営で隆盛を誇った旧金沢藩家老横山家^{よこやま} 13 代隆平^{たかひら}の分家である横山^{あきら} 章が、金沢市の自邸内に大正元年（1912）に建てた接客用の御殿の一部を大正 10 年（1921）に移築したものである。36 畳の書院座敷と 20 畳の次の間からなり、近代建築でありながら伝統的な書院造として建てられている。琵琶床には蒔絵^{びわどこ}が施された豪華な蹴込^{まさこ}がはめられ、加賀に醸成された建築・工芸技術の粋を集めて作られた希少な建物である。



無限庵御殿
(山中温泉下谷町)

2）無形文化財

無形文化財は、山中地区の工芸技術である山中^き 木地挽物^{じひきもの}の 1 件である。

a. 山中木地挽物

山中木地挽物は、芸術上価値が高く、工芸史上重要な地位を占め、かつ地方的特色が顕著な木工芸の技術である。

山中木地挽物は、天正年間（1573～1592）に現在の山中温泉^{まなごまち} 真砂町あたりにおいて、挽物職人の木地師^{ろくろ}が轆轤技術をもって生計を立てていたことが起源といわれている。

江戸中期の正徳 5 年（1715）には、現在の山中温泉地区に、木地挽物の技術が伝達されており、文化年間（1804～1818）には、細かい筋を木地に入れる加飾の技術が創作され、明治初期から轆轤の改良により挽物の技術が大きく発展し、さまざまな技術が確立されたとされている。

木の素材そのものの特色を生かし、原木の切り出しからいくつもの工程を経て完成に至るが、特に、木地の表面に鉋^{かん}を当てて細かい模様を付ける加飾挽きには千筋や糸目筋など 19 種類以上があり、これらを削る鉋もすべて挽物職人が製作する。これらは山中木地挽物の技術におけるほかに類を見ない特徴で、高く評価されている。また、山中温泉地区は職人の規模・質及び生産量において、全国の挽物産地のなかでも群を抜いている。



挽物職人

3) 民俗文化財

民俗文化財は、有形の民俗文化財が片野町の坂網^{さかあみ}猟法とその用具が1件、無形の民俗文化財が大聖寺地区の御願^{ごんがんしんじ}神事の1件である。

a. 坂網^{さかあみ}猟法とその用具

片野の鴨池は、日本海に面した自然の池で、毎年10月中旬に約5万羽の雁や鴨などが、シベリアから飛来する渡り鳥の越冬地として知られる。この鴨池に、元禄年間(1688～1704)に大聖寺藩士村田源右衛門が坂網による鴨猟を始めたという猟法が伝わる。猟では、坂網と呼ばれるY字形をした網を用いる。坂網は逆三角形の網がついた長さ約3.5mの猟具である。晩秋から冬にかけて、鴨取りは坂網をいく張りか用意し、坂場という丘陵地で、黒頭巾を被って朝夕に鴨が飛来する習性を利用して待つ。鴨は、風に逆らって飛ぶ習性があり、飛び上がった鴨の直前に素速く網を差し出して捕獲するもので、高く飛んだ鴨の場合は坂網を投げ上げるといふ特殊な技を要する。藩政期の鴨猟は、武家以外には許されなかった。



坂網猟法とその用具

b. 御願^{ごんがんしんじ}神事※

御願神事は、加賀市大聖寺敷地にある菅生石部神社の例祭(2月10日)のときに行われるもので、近年、竹割祭りとも呼ばれている。神事は、御願神事保存会が中心となり、下記の順序により行われる。

- (1) 神事の準備(大縄の綱打ち、青竹の奉納) (2) 御願神事当日の儀(四阿^{あずまや}づくり、忌火^{いみびき}の鑽り出し、青年の祈願祭、竹の切り揃え)
- (3) 御願神事(竹割り行事、大縄の行事)



御願神事

御願神事は、社伝によれば天武天皇の御願による国家安泰を祈る神事だといわれ、現在は悪疫退散・大蛇退治をかたどりあらわすものだと説明されている。しかし、貞享2年(1685)の縁起によれば、元来は年頭における年占の行事であったことがわかる。特殊神事に乏しい加賀地区において、年占行事より発展したという勇壮にして盛大なる御願神事は、敷地・岡両地区により大縄の綱打ちを始め、忌火の鑽り出しなどの古い習俗が現在に至るまでよく継承されており、民俗学的に貴重である。

※御願神事の「御願」は、「ごんがん」あるいは「ごがん」と称し、諸説あるが、本計画では「ごんがん」で統一する。

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

(3) 市指定の文化財

市指定の文化財等 133 件の内訳は、有形文化財 99 件と無形文化財 1 件、民俗文化財 7 件、記念物が 26 件となっている。

1) 有形文化財

有形文化財は、建造物が 8 件、美術工芸品が 91 件ある。

建造物では、寺社や関所門、九谷焼関連施設、北前船主屋敷など、幅広い建物が指定されており、加賀市の多様な歴史文化が伺える。

a. 旧九谷寿楽窯母屋兼工房

現在、九谷焼窯跡展示館として利用されており、吉田屋によって再興された九谷焼の最も正統な本流を引き継いだ九谷寿楽窯の母屋兼工房である。初代大蔵壽楽が窯を引き継いだ明治 33 年（1900）ごろに移築改造されて建てられたものという。当初建築の納戸部分が九谷焼製作工房に改造され、旧玄関から座敷廻りは概ね旧状をとどめていると考えられている。工房では九谷焼の一貫した作業工程を把握でき、近代の九谷焼製造工程を知るうえで貴重なものである。



旧九谷寿楽窯母屋兼工房
(山代温泉)

b. 能衣装（松竹模様長絹、鷺模様唐織、扇面模様唐織）

江沼神社に伝来する能装束で、大聖寺藩 14 代藩主前田利暲によって明治 6 年（1873）に奉納されたものといわれ、初代藩主利治が大聖寺藩主となった際、加賀藩 3 代藩主前田利常から与えたと伝えられている。歴代の加賀・大聖寺両藩主は能を愛好し、特に大聖寺藩では 14 代利暲が宝生流の巨匠とも評され修行を重ねていたことが影響し、明治以降町人にいたるまで能が浸透していた。江沼神社にはこのほか能面も伝来しているが、これらは地域の能楽愛好者の尽力によって保存継承されてきたものである。



能衣装（鷺模様唐織）

c. 朱溜塗 棗形糸目食籠

筋物挽きの創始者といわれる養屋平兵衛の作と伝えられ、原始的な手綱引き轆轤を使い、棗型に精巧に挽かれた千筋挽きの上に施された朱溜塗もきわめて美しく仕上げられ、山中木地挽物技術の技の創始を知るうえで重要な作品である。



朱溜塗棗形糸目食籠

d. 松尾芭蕉^{まつお ばしょう}筆「やまなかや」の真蹟^{しんせき}

松尾芭蕉が奥の細道の途次に山中温泉で詠んだ自作俳句2句を一紙に記入したものである。1句は、奥羽から北陸路にむかい、越中から加賀に行く途中、富山湾を右に見て稲の実りのなかを進んでいく情景を「わせの香^かや 分入る右は 有磯海^{ありそ うみ}」と詠んだ。もう1句は、山中に入り温泉に浴した気持ちを「やまなかや 菊はたおらじ ゆのにほひ」と詠んでいる。山中では旅宿泉屋に逗留しており、この真蹟は泉屋の主人久米之助^{くめ のすけ}に与えたものといわれている。



松尾芭蕉筆「やまなかや」の真蹟掛軸

e. 木瓜紋入梅花図三具足^{もっこうもんいりばいか ずみつぐそく}

再興九谷諸窯のなかでも随一の完成度を評価される吉田屋窯の作品。三具足とは、仏前に供える香炉・花瓶・燭台^{しよくだい}を一揃いとしていう語である。中央には蓋にイタチのような動物をつまみとした香炉、左には2匹の鯉が耳として装飾され、胴部に梅花樹を主題とした花瓶。右には3つの形状を合体させ胴部には花瓶と同じく梅花樹を主題とした燭台が置かれる。3点共通に豊田氏（吉田屋の経営者）の紋章である木瓜紋を配し、背景に七宝紋、波頭紋、吉田屋独特の上絵点描が立体感を出している。花瓶の裏面の銘文から、吉田屋窯開祖の4代伝右衛門^{じゅんていあん}の孫にあたる6代伝右衛門が、越前国松森村（現福井県越前市）の准堤庵に寄進したものと考えられている。



木瓜紋入梅花図三具足

2) 無形文化財

無形文化財は、大聖寺地区のお松囃子^{まつばやし}が1件ある。

a. お松囃子

能楽の正月謡初め行事で、江戸時代には幕府や各藩で行われていたが、現在まで市民有志により継承されているのは当地だけである。大聖寺藩14代藩主前田利鸞が明治以降、大聖寺地区の町民にも能楽を奨励したため、廃藩後もお松囃子をはじめ能楽の伝統は町民によって受け継がれてきた。現在は、利鸞の志を受け継いだ加賀市錦城能楽会によって江戸時代から続く伝統行事が継承され、例年正月2日には紋付・袴・裃姿の出演者により「高砂^{たかさご}」「東北^{とうほく}」「猩々^{しょうじょう}」の3番が舞われ、その演目のあいだに狂言等が演じられている。



お松囃子

第1章 加賀市歴史的風致形成の背景

3) 民俗文化財

民俗文化財としては、有形の民俗文化財が2件、無形の民俗文化財が5件ある。無形の民俗文化財では、わらべ唄「ごりよび唄」や労働歌「黒崎土ねり節」、稚児舞「敷地天神しきちてんじんちよう蝶まいの舞」、盆踊り「シャシャムシャ踊り」があり、特徴的なものとして、北前船の船乗りたちが伝えた松前追分に起源を持つとされる「山中節」がある。

a. 山中節

元禄のころより、北前船の船頭衆が湯治の際に歌った松前追分を、山中なまりで歌ったのが始まりと言われている。正調山中節の成立は、昭和2年(1927)に初代米八よねはちがレコードを出したときとされている。これによって哀調を帯びたその調べは、全国的知名度を得、山中温泉の代名詞ともなった。



山中節

4) 記念物

遺跡としては、古いものでは古墳や貝塚があり、大聖寺藩に関わる石垣や関所跡といったものがある。名勝地は、大聖寺地区の旧大聖寺藩邸庭園きゆうだいしやうじはんていていえんが1件ある。

a. 分校古窯跡群ぶんぎやうこやうせきぐん (史跡)

出土した須恵器から、窯は6世紀後半から7世紀前半にかけて操業していたと考えられ、現在確認されている窯業遺跡としては市内最古のものである。現代に続く窯業のルーツの一端と捉えることができ、九谷焼を始めとする加賀市の代表的産業である窯業史を研究するうえで欠くことのできない貴重な窯跡である。



分校古窯跡群(分校町)
(昭和47年(1972)当時)

b. 旧大聖寺藩邸庭園としなお (名勝)

宝永6年(1709)大聖寺藩3代藩主前田利直としなおの命により藩邸再建に伴い造園されたと伝わるが、定かではない。中島が浮かぶ池を中心に湧泉石組や樹木、小高い築山を配置し、池をめぐりながら、移り変わる景色を楽しむことができる。各地に造園された池泉回遊式大名庭園ちせんかいゆうしきの好例といえる。



旧大聖寺藩邸庭園
(大聖寺八間道)

（４）その他の文化財

１）日本遺産の認定

加賀市には、指定や登録等文化財以外にも、学術的または美術的な観点から貴重な所産が多く存在する。たとえ文化財の指定や登録等の対象とはならなくても、それらは加賀市固有の文化を理解するためには欠かすことのできないものと言える。

特に、北前船文化は特筆すべきものであり、橋立や瀬越をはじめとするいくつかの地区において、北前船に関する有形・無形の歴史遺産が数多く残っている。北前船の遺産は、加賀市のみならず寄港地や船主集落のあった地域を中心に全国各地に残っており、相互が関連しあって存在している。これらの北前船文化は、加賀市をはじめ全国16道府県（北海道、青森県、秋田県、山形県、新潟県、富山県、石川県、福井県、京都府、大阪府、兵庫県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、香川県）の48市町にわたる地域に継承され、「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」として日本遺産に認定されている。



船主集落の小路

２）いしかわ歴史遺産の認定

白山信仰の拠点・白山五院（大聖寺・極楽寺・小野（坂）寺・温泉寺・柏野寺）のひとつであった「大聖寺」を名前の由来に持つ大聖寺は、戦国時代には大聖寺城が築かれ、江戸時代には大聖寺藩の城下町として、庭園や長流亭を備える藩邸を中心に武家屋敷や町屋、寺院などが建ち並んでいた。

明治維新で大聖寺藩が消滅したあとも多くの歴史的建造物が残され、町割りもほぼ江戸時代の町絵図で町歩きが楽しめる「大聖寺十万石城下町～江戸時代の町絵図で歩ける町～」として、いしかわ歴史遺産に認定（平成30年（2018））された。



大聖寺町絵図（市指定の有形文化財）

(5) 特産物

a. ^{さかあみがも}坂網鴨

伝統猟法「坂網猟法」で捕った野生の鴨で、年間 200 羽前後しか捕れない貴重な鴨の味は弾力性に富み、臭みもなく、滋味と言うべき深い味わいがある。また、栄養価においても、ビタミン B 1、B 2、A や鉄分が豊富に含まれている。藩政時代には大聖寺藩から幕府へ毎年、五番（つがい）の見事な鴨が献上されたといい、古くから鴨のつがいはこの地方の結婚式の引出物に使われてきた。鴨肉に小麦粉と片栗粉をまぶし、とろりとした味と舌触りに仕上げる治部煮^{じぶに}は加賀の代表的な料理である。鴨を活かした食文化と習俗が数百年の歴史を越えて、この地に伝えられている。



治部煮

b. 加賀梨

加賀市 ^{おくの や}奥谷と ^{おしおつじ}小塩辻の2つの産地でとれるのが加賀梨で、石川県内で最大の梨の産地である。こだわりを持った生産者が作り出す加賀梨は、光センサーを使って1つずつ糖度をチェックするなど、厳しい検査に合格したものだけを出荷。太陽の恵みをたっぷりと受け取った、甘さとみずみずしさを楽しむことができる。旬の出荷時期は8月から10月上旬まで。



加賀梨

c. ^{こうばこ}香箱ガニ

香箱ガニとは北陸地方で獲れる雌のズワイガニのことである。雄のズワイガニと比べ小ぶりの外見の中には、茶色の外子（そとこ）と呼ばれるつぶつぶの卵、そして味噌の部分であるオレンジ色の内子（うちこ）を持つ。小さな分だけ味わいは濃厚で旨味も多い。雌の方が禁猟期が長いため、11月頭から年末ごろまでの短い期間が旬である。橋立港は蟹の水揚げ港として知られ、地元産とれたてのズワイガニを味わおうと、全国から食通たちが足を運ぶ。



香箱ガニ

d. 天然岩ガキ

岩ガキは、海水中のプランクトンを食べ、1日に大量の海水を取り込んでおり、良質なプランクトンが生息する自然環境が必須条件である。加賀市の海岸線は、国定公園に指定されており、透明度の高い海に点在する岩礁が数多く存在する。また、外海であることから、潮の流れもよく、プランクトンも豊富なため、岩ガキにとっては最高の生育環境といえる。その結果、濃厚なうま味をもつ、食べ応えあるカキに育つ。



天然岩ガキ